全軍約六萬が勇躍華北各地に進出した。

また「大長征」の途次、四川から再び舊江西ソ區に引き返してゐた紅軍別動隊の葉挺、項英氏の軍も其後國民革命軍新編第四路軍（通稱新四軍、軍長葉挺、副軍長項英氏）と改稱、華中各地に遊擊戰を展開することとなつた。新四軍は當時四個支隊に分れ、總員約四萬といはれた。

九月二十二日、蔣介石氏は公式に共產黨軍の國府軍委會隷下における合法性を承認する談話を發表し、共產軍の一一五、一二〇、一二九の三師に對して國民革命軍第十八集團軍の名稱を與へた。

越えて三八年一月一日、國府は朱德氏を華北遊擊軍總司令に任命したが、同年より三九年にかけて國共兩軍の衝突が頻發したので同年初頭、中共側は國府に對し、第十八集團軍の編成、配置及び同軍各級將校の任免は中共側の手により自由に行ふ旨通告してをり、また朱德氏は四〇年十月、國府軍事委員會より第二戰區副司令長官（長官閻錫山氏）の肩書を貰つたが、一度も第二戰區の指揮下に入つたことはなく、中共軍は實質的に終始國府軍事委員會より獨立して今日に及んでゐる。

B、國共相剋

國共首腦部が民族解放の抗日戰といふ共同目標に妥協しても、あの凄慘な瑞金攻防戰を戰つた兩軍將兵の對立意識を一朝に氷解させることは不可能であり、また華北進出當初の中共軍に華中、華南出身者が多く、ために華北民衆の間に食はず嫌ひとでもいふべき一種の對共嫌惡感が存在したことも確かである。相剋の火の手は先づ河北にあがつた。

（一）七路、九路

中共一一五師（長林彪、副聶榮臻、後師長陳光氏、聶氏は冀西に磁り晉察冀邊區を建設）が河北省西北部に進入した時、そこには七路軍と稱する孟閣臣部隊、九路軍と稱する趙玉崑部隊を始め、大は數千より小は數百數十に至る種々雜多の土民軍が蟠踞してゐた。

同師はまづ孟部隊に協力を求めたが峻拒されたので、冀西の滿城における數晝夜の激戰の後、孟隊長を生捕の上銃殺し、同部隊の大半を同師の傘下に吸收した。風を望んで慄へ上つた趙部隊も忽ち「九路」の旗を捲いて「八路」化した。

一九三八年初頭には萬福麟系の舊五十三軍の殘部が呂正操團長に率ゐられて八路軍に投じ、翼中第三縱隊に改編された。また同年末より翌三九年初頭にかけて國府河北省主席鹿鍾麟麾下の張蔭梧部隊及び孫殿英部隊が冀中平原で八路軍との凄慘な死闘を展開し、張部隊の大半は博野附近で八路軍に吸收された。

同年三月には石友三部隊が順德附近で八路軍を襲撃して一個中隊の兵を殺戮し、八路軍邢仁甫部隊及び陳光麾下の一二五師東進部隊は冀中南、魯西地方で鹿鍾麟、高樹勳、于學忠等國府系將領の部隊と激戦してこれを破り、同年末には山西軍と八路軍の戦闘も隨處に惹起された。

一方華中では、第九戦區薛岳麾下の特勇隊が湖南東北の平江で新四軍の留守部隊を襲殺し、全中共黨軍の憤激を買つた。

三九年中三次に亘り雲南省主席龍雲、第九戦區司令長官薛岳氏及び鹿鍾麟氏ら十五華北將領連名の反共通電が發せられ、翌四〇年十月には參謀總長何應欽、同副總長白崇禧氏の名で朱德、葉挺氏宛の通電が發せられて、中共黨軍は同年七月の國民黨提案に基き朱德責任地區と定められた河北、察哈爾兩省及び山東、山西の北部地區に一箇月以内に移動すべき旨を命ずるに至り、國共兩軍の反目はいよいよ募るのみであつた。

(十一)　皖南事件

かかる抗戦中の國共相剋の中で中國内外から最も重大視されたのは一九四一年一月の皖南事件である。

新四軍と第三戦區顧祝同軍の軋轢訌爭は新四軍の成立以來のことであるが、同軍が國府側の度重なる「朱德責任地區」への移駐命令に、同年一月初頭やむなく江南の豐沃な地盤を棄てて北に向つたことは事實である。

然るに途上たまたま日本軍の前哨線を發見したので（顧軍はこれを顧軍司令部を攻撃せんがためといつた）急遽、踵を返して再び南下し、一月十二日主力一萬が安徽省南端の太平北方に至るや突如第三戦區副司令長官上官雲相麾下の七萬がこれを包圍急襲し、血戦三日間に亘り同胞相喰む慘劇を演じて、新四軍側に死傷四千、捕虜二千を出し、軍長葉挺氏以下多數の幹部は捕縛され副軍長項英氏は重傷後死亡し、多くの幹部は行方不明となり、全軍は其場で顧司令部から嚴達された軍事委員會の解散命令により解體された。

なほ同じ頃、彭德懐氏の家族も鄉里の湖南省湘潭において同地の警備司令に逮捕され、彭氏の

三弟玉華氏は即座に銃殺された。

延安の中共中央は皖南事件の報に激怒し、何應欽氏を呼んで「親日的反共頑固派」となし、その處罰と葉挺氏らの釋放、華中における剿共行動の停止、西北反共封鎖の撤廢、新四軍の再建等の認などを屢次に亘つて蔣介石氏に要求するところあつた。

重慶側は當初、皖南事件は韓復榘、石友三の銃殺と同一の軍規肅正である、と強硬に突つぱねやうとしたが、其後同事件のソ聯側に與へた惡影響が意外に深刻であつたことに氣がつき、第十八集團軍の現狀維持承認、軍費支給、逮捕者の寛大なる處置、但し新四軍の復活は認めず、などの妥協條件を提示し、國民參政會などを通じて揉みに揉んだが結局中共側の滿足するところとはならなかつた。

新四軍は其後新軍長陳毅氏（前第一師長）の統率下に再建され、反つて強大なものとなつて行つた。

（三）爺臺山事件

一九四〇年春の日本軍の「中原作戰」四一年夏の「鄭州作戰」四三年春の「十八春太行作戰」四四年春夏の「河南作戰」などで第一、二、冀察、魯蘇戰區などの國府軍が後退した後には常に中共軍及び中共系武裝兵力が急速に增大して行つたが、これに快からぬ國府軍と中共軍の相剋は年々絶えなかつた。

就中、皖南事件以前より河防軍（實は對共包圍軍）として西安北方にあつた胡宗南部隊と賀龍、蕭勁光氏の晉綏陝甘寧五省聯防軍、後方留守部隊などとの對立訌爭は最も激しいものであつた。

一九四三年六月十日のコミンテルン解散直後、朱紹良、蔣鼎文、傅作義、胡宗南、楊愛源、馬鴻逵、谷正倫、熊斌氏ら晉綏陝甘寧地區の重慶側軍政長官は洛川に會し、國府國防最高委員會に對して、この機會にこそ中共黨軍を殲滅し赤化の禍根を斷つべし、との强硬意見を具申したが、重慶中央の態度も次第に硬化し、商震、周至柔、楊杰氏らが西安に飛び、河防軍が大擧西北進して中共軍陣地に砲擊を加へるなど情勢は極度に緊迫した。

翌四四年六月にはウォーレス米特使の調停で一時この空氣を緩和したが、四五年ドイツ降伏して長期抗戰の勝利がいよいよ確實となるや終戰後の優勢確保をめざして國共兩軍間の大規模な相剋が遂にここに爆發した。

同年七月二十一日、陝西省中部の同官、耀縣、涇陽、乾縣、興平一帶に集結しつつあつた胡宗

南軍七個師は、突如中共軍の守備する淳化、耀縣地區の爺臺山に對して攻擊を開始し、激戰數日、兩軍に相當の死傷者を出すに至つた。

中共側は直ちに第十八集團軍朱、彭正副總司令と五省聯防軍賀、蕭正副司令の名で二回に亘り通電を發し、重慶側に對して内戰危機の回避と眞相調査を要請したが、結局有耶無耶に終り、兩者の間に深い溝を殘したまま終戰を迎へたのであつた。

C、黨政軍民一體の遊擊戰

江西ソヴエートにおいて僅か十萬内外の兵力を以てよく數年に亘り百萬の蔣軍に抗抗し、一再ならず奇勝を博した紅軍の强みは遊擊戰術にあつたが、抗戰中の國共相剋においても屢々優勢な國府系軍隊を擊破し、これを吸收し得た所以もまた遊擊戰に外ならない。

然も如上の困難なる環境下においても常に「最大の敵人」日本軍閥の打倒に專念し、劣惡なる裝備、給與、機動力をもつてなほよく毛澤東氏の所謂「防禦」「對峙」「進攻」の抗戰三段階を戰ひ拔き、遂に赫々たる勝利を收めて日本帝國主義を驅逐し、中華民族をその桎梏下より解放し得たのもまた、その卓拔なる遊擊戰術に負うところが大であつた。

然らばかかる中共軍の遊擊戰の强みは一體如何なる所に由來するのであらうか。

それは中共軍が民衆の軍隊として勞農階級のみならず中小資産階級からも一致せる絶對的支持を受けてゐるのと同時に、黨、政、軍が常に文字通り三位一體となつて緊密に結合し、最高領袖の意圖が黨、政、軍の末端まで確實に滲透實踐されてゐるからに外ならない。

（一）軍　内　黨

中共黨部は共産軍に對する指導權を握つてゐる。

軍内の政治工作、思想工作を行ふとともに地方黨並びに行政機關と協力して、黨、軍の擴大工作を實施するため軍内黨が設けられてゐる。

軍内黨の組織は中共中央軍委會の下に第十八集團軍及び新四軍の總黨務委員會があり、その下の師（縱隊）旅（獨立支隊）には黨務委員會、團（聯隊）營（大隊）には總支部、連（中隊）には支部、排（小隊）には小組が設けられてゐる。連支部は軍内黨の基本單位で、黨員七名以上を有する時に始めて連支部が組織され、七名にみたない時は先づ小組が組織される。排小組は地方黨における小組と等しく軍内黨の細胞であり、小組長は政治戰士と呼ばれ、率先垂範による士兵

の教化に挺身してゐる。

各級黨部はまた地方黨部に準じて各級黨務委員會（團總支部以下は支部委員會）を同級政治部内に置き其の領導を受けてゐるが、これは單に上級黨部とのみの關係を有する地方黨と異つてゐるところである。すなはち軍内黨はあらゆる黨務に關し、軍内における中共黨代表で政治會議の主席である政治委員（連以下は政治指導員）の領導下にあるのである。

（二）政治委員、政治部

軍内における黨工作と政治工作を直接指導するものは政治委員である。政治委員は團以上の部隊（または軍醫、軍分區、獨立遊擊隊、獨立支隊等）及び中央直轄機關、學校などに一名づつ置かれ、黨を代表して軍隊内における黨の政治方針と紀律を執行する責任者となり、軍隊内における一切の黨工作と行動とを左右する權力を持つてゐる。軍事司令官が若し黨の方針に違反したり、或は作戰上の重大な過誤を犯すやうなことがあれば其の命令權を停止し、または上級機關に對してこれを彈劾することが出來る。

作戰關係の指揮計畫事項は軍事司令官が政治委員の協力を得て決定するが、黨務及び政治關係においては政治委員が單獨の命令權を有してゐる。また政治委員は人事權を掌握し且つ反革命行爲に對する執法權を持つてゐるので、軍隊内における政治委員の權威は絶對的である。

一方、政治部は軍内黨を指導するとともに軍内の政治工作を擔任し地方黨工作に協力するなど政治委員と並ぶ重要機關で、中共軍に戰鬪部隊たると同時に政治部隊としての一大特色を與へてゐる。

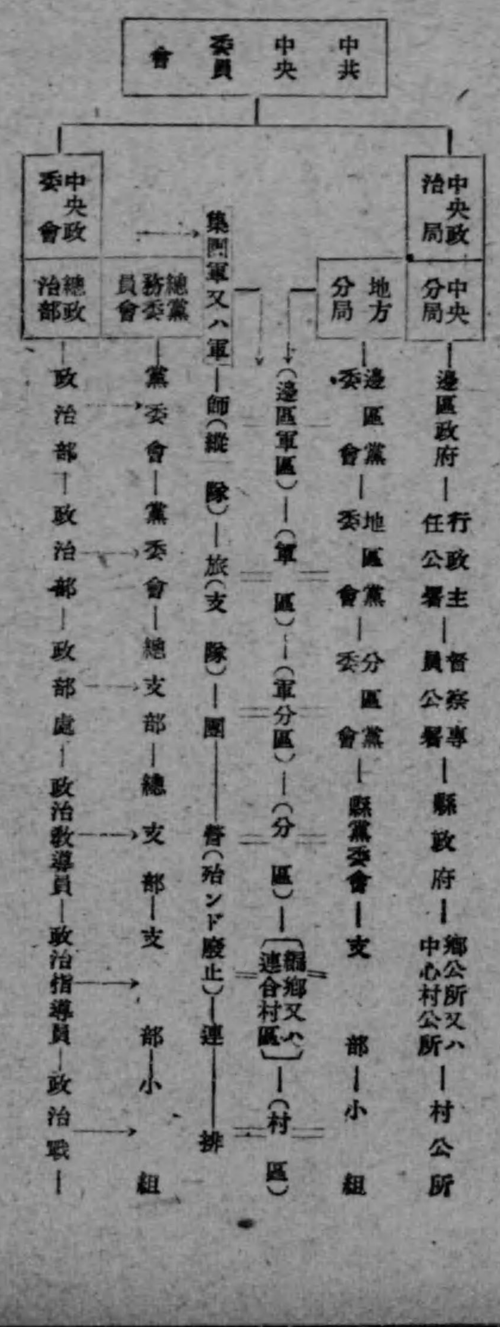
政治委員は其の任務により直屬の上級政治委員の命令に服從するが、政治關係ならびに一般黨務に關しては上級政治部に服從することになつてをり、政治部主任及び同部要員は政治委員と一體不可分の關係に置かれてゐる。政治部の組織系統は中共中央軍委會の中に總政治部があり、その下に集團軍（軍）師、旅、軍區、軍分區、獨立部隊、學校、醫院、兵站などの各政治部が設けられ、その下の團には政治處、營には教導員連には指導員を置いてゐる。

各級政治部は政治工作ならびに軍内黨務に關して上級政治部の領導を受け、直屬上級政治委員に服從する。而してこの政治部主任と政治委員、若しくは政治委員と軍事司令官の事實上における二位一體制（兼務）が近來漸增しつつあるが、これは煩瑣な指揮領導系統を單純化するとともに、軍事司令員と政治委官との間に惹起され易い無用の摩擦を避けんがためであり、地方雜軍等

を吸收して新軍を編成した當初には免れ難かつた軍事司令官以下の非黨員幹部と政治委員らの反目内訌も今は全くその跡を絶つに至つてゐる。

峻厳なる黨規と黨の絶對命令を以て縱貫され、血と汗と涙の同志愛を以て横に結ばれたかゝる軍内黨政機構の存在こそ、中共黨軍をして今日の大を成さしめる礎石となつたものである。

軍内黨と地方黨、軍内政治部と地方行政機構の關係などを圖示すれば次の通りである。



(三)　正規軍、遊擊隊、民兵

正規兵力を中軸とする民衆武裝化の擴大强化は、やがて遊擊隊、地方正規軍の擴大强化となり、正規軍の擴充發展となるのである。

七、七事變勃發直後に中共中央は各級黨部に對する緊急指令を發し、その年――一九三七年三月の中央指令（義勇軍組織大則）に基き、速かに各種抗戰團體を組織化すべきことを指令し、同年八月十五日の「抗日救國十大綱領」においては全國軍事の總動員を强調したが、十一月十二日に至り「遊擊戰術論」を配布し『民衆の武裝組織による抗日遊擊隊の編成と遊擊戰術の重要性』を說き、全華北に亘つて戰線より脱落した正規軍、雜軍を始め、紅槍會、大刀會、黄紗會、白松會、藍子會、黑族會、青幇、紅幇等の民衆自衛組織や秘密結社及び鄉村の聯莊會、自衛團、民團などに積極的に働きかけ、これを吸收整理して遊擊隊に再編する一方、縣、區、鄉村に抗日救國會、人民自衛隊などを、各級學校、醫院、紗廠、郵政局、電燈廠などに抗日除奸團、民族解放先鋒隊などを、また青年男女間に青年救國會、婦女戰時工作團、抗敵會、戰時服務團等を組織し、抗戰常識研究班、青年救亡會、青年生活委員會、中ソ文化協會、學聯社、抗敵後援會等々の中共

系乃至人民戰線派系の各種團體とも緊密に連絡し、或は直接、間接にこれを指導し、廣汎强靱な全民衆的戰力を發動するに至つたのである。

翌一九三八年十一月には黨組織の再整備を行ひ、各級黨委員會に戰時動員部（人民武裝部、民衆武裝部、擴軍部などの名稱も用ひられる）敵僞工作部、統一戰線部などを設け、黨軍一體となつて、民衆の武裝動員と日鮮人の反戰同盟（後の解放聯盟）などを指導して行ふ日本軍及びその傘下の僞軍に對する解體吸收工作、並びに主として國共合作の强化を圖らんとする統戰工作乃至國民黨系軍隊に對する宣傳工作を强化し、さらに「淪陷」地區における情報蒐集、宣傳、不協力工作などと相俟つて、敵前、敵後、後方大後方地區のすべてに亘る綜合且つ有機的な一大遊擊戰線を展開して行くのであつた。

ここに最も注目すべきは一九四二年以降特に活潑化した民兵（自衛隊）工作であるが、專ら自村自衛に挺身する農民兵として縣村武裝委員會の指導下に全中共地區に亘つて組織されたこの民兵制度は、よく中國農村社會の特質と農民の愛鄕崇祖心に結びついてゐたため、飛躍的に擴大强化され、殆んど家內工業的生產による武器のみによつて武裝された民兵の防衛戰が、反つて近代裝備の日本軍を辟易させることも一再ならずといふ發展振りを示すに至つた。

かかる民衆武裝工作の進展は必然的に中共の外廓勢力たる縣、區遊擊隊（各行政機關の人民武裝部に隷屬するも軍事的には軍の指揮領導下にある）の强化となり、縣、區遊擊隊はまた正規軍の兵力補充源となつて、その訓練向上に伴ひ逐次正規軍に改編されて行つた。

中共軍が一方において屢々統一戰線分裂の危機に腦まされながら、他方においてよく頑强なる日本軍の「掃蕩」「封鎖」に對抗してこれに耐へ拔き、逆に「反掃蕩」「逆封鎖」「百團進攻」をさえ實施し、初めて黃河を渡つた時には僅か數萬にしか過ぎなかつた中共軍が抗戰八年にして、年々の創痍を癒やした上に更に正規兵力六十五萬、民兵二百五十萬にまで擴大發展し得たのは、全くかかる全民總動員の基礎に立つ遊擊戰線を展開してきたからに外ならない。

（四）遊擊戰術

中共の黨政組織においては以上に觸れた如く、實際政治の衝に當る行政主任、督察專員、縣、區、鄕村長などが、軍區司令（師長、縱隊長）軍分區司令（支隊長）獨立團長（縣、區遊擊隊長）自衛隊長などとして自己の武力を掌握してゐる場合が多く、平素はこれを黨政施策遂行上の睨みとして活用してゐるが、一たび外敵の侵寇に遭ひ或は進擊を必要とするに至れば、忽ち各級防衛

司令または進擊部隊長となり、戰時動員部（縣村においては武裝委員會）の協力指導下に速かに住民の退避、物資の隱匿等を實施させ、全隊員を行政區軍械工廠などで製造または修理された小銃、擲彈筒、手榴彈などで武裝させるとともに（抗戰後半に入り鹵獲兵器漸增）鐵瓶、鍋、釜までも動員して造られた地雷、石雷、空雷などを豫定の箇處に埋設または裝置し、夜間なれば完全に全部落の燈火を滅し、神出鬼沒、變幻自在の遊擊戰鬪に移るのである。

鄉村自衞の主力はあくまで民兵であり、防衞戰は主として民兵によつて戰はれ、遊擊團または基幹隊など縣以上の組織は防衞戰よりも多く積極的遊擊に用ひられる（但し地方正規軍、遊擊隊は戰ひ敗れた場合においても自己の擔當區域に留まるを原則とする。）

敵の大擧來寇した時、または優勢な敵と遭遇した時は、遊擊隊は所謂「整を化して零と爲す」で、散りぢりばらばらに分散してその存在を秘匿するが、敵が一たび引き揚げ、または少數となつたり大部隊でも身動きならぬ險要を通過するやうな場合には忽ち「零を化して整と爲」し、集中威力を發揮してこれを急襲する。

「敵進我退、敵駐我擾、敵退我追」の遊擊原則は遺憾なく全遊擊隊によつて實踐され「空室淸野」または「兩平三空」方針は、全民衆の積極的協力によつて、常に確實に實施されたから、如何に近代裝備を誇つて「掃蕩」に赴いた侵寇軍も幾干もなくして饑渴と奔命に疲れ、遂に空しく否屢々多大の損害を蒙つて潰退するより外はなかつた。

中共軍の地雷戰は特に徹底してをり、夜間中共地區に侵入した敵は絕對に身動きがならなかつた。敵の交通、兵站、通信線の破壞に關する民衆の力もまた非常なものであつた。

しかも各村落の下には地下壕が縱橫無盡に掘り廻らされ、村と村とは幹線地下道を以て直結され、その出入口は民家の壁、土間、古井戸の側壁などに秘匿されてゐて、外來者の發見は殆んど不可能であり、圍攻軍は今の今まで彈丸を亂射してゐた城內に入つてみても最早猫の子一匹、粟一粒も見當らず、引き返して來ればまた土城の蔭より狙擊されるといふやうなことが普通であつた。

同志間、村落間、部隊間の連絡法もまた玄妙を極め、或は手榴彈、呼笛の音數により、或は打鐘により、或は物干にかけられた干物の色、數または燈火などによつて連絡し、外來者はその實相を窺知することが至難であつた。

さらに「東聲西擊、西聲東擊」「三面埋伏」「反間東道」など三國志や水滸傳、否春秋戰國以來練りに練つて傳へられた中國式遊擊戰術の粹と朱德氏らが青年時代の歐米留學から近時の獨ソ

戦の教訓に至るまで刻苦研究して會得した近代戦術の妙とがよく調和活用されたのである。

遊撃戦法は今後もながく中共軍の最大の強みであり、またその最も恃むところとなることに變りはないであらう。

D、愛される共産軍

民衆の支持なき軍隊は如何に強大であつても遂に亡び、民衆の絶對的信頼をかち得た軍隊が榮えるのは古今の鐵則である。

然らば中共軍に如上の遊撃戦闘を可能ならしめ、また現に可能ならしめつつある中共地區中國民衆の對共絶對協力は如何にして生れたのであらうか。

「大長征」以來一時全中國に喧傳され民衆を畏怖せしめた紅軍の「殺人、放火、掠奪、活埋、姦汚」等々は如何にして民衆の腦裡から拂拭されて行つたのであらうか。

それは黨政幹部の徹底せる對民衆工作と中共軍士兵に對する政治教育の成功である。

中共軍は新民主主義の軍隊である。勞農階級のみならず軍閥、財閥、大地主を除く一切の民衆の利益を擁護する民衆のための軍隊である。民衆と中共軍とは水魚の關係にあり、水を離れた魚は一刻も生存し得ない。かかる觀念が全士兵の隅々にまで徹底してゐるのは眞に驚嘆に値する。

またそれは單に中國民衆に對してだけではなく被壓迫民族、新たなる被解放者、たとへば日鮮軍民の捕虜、中共參加者等に對しても全く同樣な「一視同仁、四海之内、皆弟兄也」の觀念で遇したのである。中共軍は行軍中には絶對に畑の中に入ることを禁じられてをり、戦闘中でも萬やむを得ない場合にのみ畑の中に入ることが出來るといふやうなことが嚴守されてゐる。

村落に宿營しても決して勝手な徴發などは行はず、買物をすれば必らず相當の代價を拂ひ、出發に當つては農家から借りたものはそのまま返し、破損したものは辨償する。また宿營した後は必らず掃除して出て行く。一事が萬事で對民衆軍紀は實によく守られてゐる。ここに民衆の中共軍に對する信頼感は高まり、反對に亂暴狼藉の限りを盡す「害民軍」への憎惡は強くなつて、民衆の對共協力はいよいよ積極的となり、民衆の中から中共軍士兵志願者も增加して行くのである。

(一)　子　弟　兵

かくて中共軍の擴軍工作は順調に進展する。「老百姓のために老百姓の鄕土を守る老百姓の子

弟兵」このやうな壁書きが中共地區の到る處でみられる。

軍隊補充工作の實施に當つては決して民衆を强制することなく、一家の大黒柱たるもの以外の所謂「冷飯食ひ」の子弟らが自發的に黨軍に參加するのを歡迎する。

中共軍に入つた後の昇進は實力本位であり、二十臺の團長（聯隊長）旅長（旅團長）も少くない。軍隊内ではビンタなどの私的制裁は絶對に行はれず、不良者に對してはあくまで説得主義乃至感化主義によつて衷心からの反省悔悟を求める。

平常、司令も當番兵もみな一樣の棉服を纒ひ、同じ粟粥を啜る。かくて隊内の團結はいよいよ鞏化し、外に對してはこの子弟兵を紐帶に民衆とがつちり手を握り合つて長期抗戰を戰ひ拔いてきたのであつた。

（二）自耕自織

中共軍の軍糧は全部自辨が建前になつてゐる。

中共軍は民衆の負擔を輕減するために自ら農耕をやり、前線の戰鬪の多い部隊でも所要軍糧の三分の一を生産せねばならないが、後方部隊では全額以上を生産して前線部隊の不足を補ふことになつてゐる。

幸ひに晉綏陝甘寧諸省の後方、大後方地區には未開の原野や荒廢せる廣大な可耕地が殘つてゐて中共軍士兵の開墾を待つてゐる。

政府機關の職員や頭腦勞働者も一定時間農耕や機織りなどを行ふことになつてをり、その勞働量は年に粟一石を生産するに相當したものとされてゐて、黨政領袖以下全部これに從事するのであるが、軍隊ではそれが特に徹底してゐる、師長、旅長も率先して農耕に飛び出し、女兵らは宣傳、看護等の暇々に裁斷、縫織の手を休めない。

中共軍の將兵は近來全部一樣に無給となつたが、自ら耕し自ら織つた衣食を全將兵とその家族に平等に分配され、且つ婦人の産前産後などは特別に保障されてゐて、生れたばかりの赤ん坊にも一人前のものが與へられるから、中共軍將兵には眞に後顧の憂ひがないわけである。

黨政首腦が特に重點を注いでゐる春耕にも主要な役割を果すのは中共軍の士兵である。

播種期には「秧歌隊」と呼ばれる歌や芝居の宣傳隊が村々を練り歩いて、面白可笑しく「春種一斗、秋收萬石」を説き、播種面積の增大を勸め、且つ老百姓の勞を慰め黨軍の宣傳をする。

中共軍の士兵らは各級黨部の春耕委員會に協力して各級部隊ごとに熱心に耕作、播種、灌漑の

すべてに從事する。「秧歌」――早苗歌を口ずさみながら自らの口に入る自らの作物を手がける士兵の顏には喜色が溢れてゐる。

秋收期における士兵の活躍もまた春耕期に劣らず、接敵地區では屢々夜を徹して收獲競爭が行はれた。

(三) 軍政大學

七、七事變このかた日本帝國主等の侵寇に憤懣やる方なき中國の愛國青年男女は續々と延安に向つた。

延安の中國人民抗日軍政大學は昆明の西南聯合大學にもまして「淪陷」地區を去つた男女學生で押すな押すなの盛況であつた。

彼らの多くは當初共產主義がどうの、新民主主義がどうのといふよりも、何とかして抗日領袖の下に自らの腕と頭とを磨いて、煮えくりかへる愛國の熱腸を「日寇」に叩きつけてやりたいといふのであつたが、毛澤東氏も同校は別に一黨一派のための學校ではなく廣く抗日救國を志す愛國的青壯年に開放されると述べてゐる。同校の入學資格は中等學校卒業以上となつてゐるが、勞工出身者には別に學歷を問はないし、修業期間も六箇月（研究科は三箇月）の速成教育なので當初入學志願者が殺到し、東北、內外蒙、新疆などの邊疆より比島、ジャワ、アメリカ方面からまで寢具や身の廻り品を背負ひ、遙に幾山河を越えて蟻の甘きに慕ひよるが如く延安へ延安へと續き其の數は一時年五萬にも上つた。其後入學資格を限定して黨政軍の上級機關から選送するものだけとし、延安の後方總校に二千、晉東南の前方總校に千、其他の十分校に三千、合計五千を每期の收容人員と定め、年に約一萬の初級軍事指揮員や政治指導員を養成したのである。

學生はすべて軍隊組織で、後方總校ではこれを五個大隊二十個中隊に編成し、うち七割は軍事部、三割は政治部で、軍事的紀律の下に一般戰術、パルチザン戰術、馬列主義（マルクス・レーニン主義）宣傳原理、民衆組織、革命運動史、中國經濟、統一戰線の理論と實際などについて講義し、さらに戰鬪教練、國內國際諸問題の討論、政治工作の實地訓練、行軍、新聞編輯、自衛團隊の組織演習なども實施した。

校長の林彪氏（後、徐向前氏）以下の各教授はもちろん、毛澤東、朱德氏らも屢々訓話や講義に出席し、その烈々たる革命的情熱を傾けて後進の薰育に努めたので、修業時には全學生何れも例外なしに熱心な馬列主義者となり、全心全靈を黨軍にうち込むやうになるのであつた。

一九四〇年の日本軍遊擊隊の晋東南における中共黨軍根據地への挺進奇襲、同四二年の晋察冀邊區に對する長期圍攻「冀中軍區剿滅作戰」などで中共黨軍の蒙つた損失は決して小さいものではなかつた。前者においては第十八集團軍副總參謀長左權氏以下多數の幹部が殪れ、後者においては同邊區軍の死傷六萬二千、黨軍幹部だけでも六十八名に上り、その中には二名の政治主任、三名の軍分區司令、一名の副司令などが含まれてゐたが、中共黨軍がこれら犧牲者の後を常に迅速に補充して微動だもさせなかつたのは、一にこの「抗大」における青壯年幹部の大量練成の結果に外ならなかつた。

なほ「抗大」の外に重慶陸大の參謀訓練班に比すべき團長級の訓練所も其後陝北の綏德に設けられ、一九四三年以來の精兵簡政方針に即して抗戰中新たに中共軍に加入した部隊の高級將校、司令員らの素質向上に全力が注がれた。

この外、陝北公學、各邊區附設の中等學校、解放聯盟の工農學校、及び終戰後河北省順德に設けられた北方大學なども「抗大」と相呼應して中共黨軍の人材補充に偉大な貢獻を續けて現在に至つてゐる。

第三節　國共停戰と現勢

終戰前の一箇年間に一千以上の部隊を以てする國共兩軍の衝突が二千餘回の多きに上り、爺臺山事件の餘燼なほ消えやらぬさ中の一九四五年八月十五日に日本は遂に降伏した。

同年春ナチ・ドイツの崩壞により抗戰の勝利近きを觀取した中共中央は、「百旅進攻」を計畫して日本軍閥の死期を早めんとする一方、日本軍が米の接岸作戰に備へて續々奥地兵力を抽出轉用するに伴ひ、逐次その後に中共軍を入れて解放地區の擴大を圖り、他面冀魯邊軍區と清河軍區を合併し、渤海軍區を新設して海岸地區を固め、さらに五月頃より河北の兵力を熱河、遼寧方面に潜入させ、冀熱軍區（舊晋察冀邊區第十三軍分區）を母胎とする冀熱遼邊區軍區を强化して終戰後の東北確保を策するなど慌ただしい空氣は看取されたが、日本降伏までには尙相當の日子を要するものと中共側は見込んでゐたものの如くである。

從來曲りなりにも延安、南京、重慶と魏、吳、蜀の天下三分の形勢を示してゐたものが、日本のあつけない敗北により南京政權が脆くも潰え去つたため、俄かにそこに大きな間隙を生じた。

戰後の旋風はその眞空狀態の中に起つた。

聯合軍の協定により日本軍は重慶側に降伏するやうに命ぜられたが、奥地の中央軍が舊「淪陷」區に受降に來るまでには相當の時日を必要とした。

中共中央は中共軍もともに日本軍の武裝解除に參加すべきことを主張し、且つ解放地區の擴大を求めて城市の先制獲得に乘り出し、これがため國共接觸地帶では激烈な鬪爭が惹起されるに至つた。

重慶側は胡宗南第一戦區司令長官を陸路北上軍の總司令とし、同時に河北、山東兩省に第十一戦區を新設して孫連仲氏を司令長官とし、その上に北平行營主任李宗仁氏を据ゑ、新たに歸綏に進出した内蒙の第十二戦區傅作義軍、太原に進出した山西の第二戦區閻錫山軍、新設の徐州綏靖公署顧祝同軍、及び京滬に入つた湯恩伯軍、秦皇島に上陸して熱河、遼寧に向つた杜聿明軍などと相呼應して、華中、華北、内蒙、滿洲に亘る大規模な「剿共」戦を發動せんとするかに見えた。

これに對し延安側は先づ聶榮臻麾下の晉察冀邊區軍を張家口に入れて、日本軍がソ聯から内蒙を防衛するために準備してゐた大量の兵器、彈藥、糧秣、被服などを入手するとともに晉北の大同を攻撃させ、一方五省聯防軍司令賀龍、晉察冀邊區軍副司令蕭克麾下の軍隊をそれぞれ歸綏、包頭の攻撃に向け、冀熱遼邊區李雲昌軍と晉察冀邊區直轄區の呂正操軍（呂氏は後に晉綏邊區軍區司令）を熱河、瀋陽（奉天）方面に派遣し、張學銘、張學喜氏ら舊東北軍の張一家の人々とも協力して舊「滿洲國」軍の吸收、勞工の武裝化などに努め、着々、内蒙、華北、滿洲の新舊地盤を固めて中央軍の攻撃に備へた。

九月、河南より北上した第一戦區の高樹勳麾下新編第八軍及び新任河北省主席馬法吾麾下の第四十軍は冀南磁縣附近の戦鬪で、晉冀魯豫邊區の劉伯承軍に潰滅的打撃を喫し、二軍長は中共軍の捕虜となつた。（馬氏は後に重慶の葉挺氏と引き換へに釋放された）

華中では新四軍の浙東遊撃縱隊が北上中に中央軍の攻撃を受けて激戦を交へ、蚌埠、嘉山方面の新四軍對中央軍の戦線は六十マイルに亘つた。

大同、歸綏、包頭の圍攻軍は其後察哈爾方面に引き揚げたが、山西の過半數の縣は中共軍の手に歸し、第二戦區軍が計畫した八「剿共」區における「剿共」軍事行動も何ら見るべき進展は示さなかつた。山東南部では中共軍による臨城及び棗莊の圍攻戦が展開され、同地にあつた日本軍民が徐州方面に撤收すると同時に同地方一帶は中共軍の手に落ち、新四軍長陳毅氏は山東軍區軍の一部が北上した後を承けて泰安方面に入り、魯蘇豫、蘇皖、豫皖鄂邊區に號令することとな

つた。また滿洲方面では秦皇島から山海關、錦州を經て瀋陽に向つた中央軍が同地入城の期を中ソ間で折衝してゐるうちに、營口、撫順、鐵嶺等の要衝を次々に押へ、南滿の中共系軍隊三十萬と北滿の國際共產軍十五萬、及び赤色東蒙軍などが相呼應して長春周邊、哈爾賓、齊々哈爾方面までその勢力下に收め、遼寧、吉林、黑龍江、合江安東、綏寧諸省に早くも人民政府の基礎を確立してしまつた。

かくて華北、內蒙、滿洲方面の廣汎な「面」と大半の「線」は中共軍の手中に歸し、空輸または海上轉送された中央軍には僅かに「線」の一部と「點」のみが殘されてゐたに過ぎなかつた。

A、停戰と裁兵

かかる急激な惡化をみた國共關係も毛澤東氏が八月末、蔣介石氏の招請に應じて重慶を訪れ、蔣氏と四十五日間に亘り會談した結果、國共紛爭解決に關する過渡的妥協案に到達し、十月十一日、蔣毛共同聲明を發して延安に歸還した。國共和平解決の曙光はここに輝き始めたのである。

この妥協案の內容は十二項から成るもので、延安側の主張する中國共產黨の合法性の承認、政治犯人の釋放等の要求が容れられ、ある程度、國共和解への障碍物が除去されたのであるが、肝腎の中共軍が戰前戰後にかけて其の勢力範圍としたいはゆる解放地區の問題、ならびに中共軍の再編國軍化等に關する問題は未解決のままに殘されたのであつた。

(一)　軍事衝突停止令

毛澤東氏の歸延後、重慶では國府側張群、邵力子、王世杰、中共側周恩來、王若飛、葉劍英氏らの間で引き續き折衝が續けられたが、軍政軍令の統一と軍整編問題の解決を國府の民主化に先行せしむべしとする國府側の主張と、國府の各黨各派への解放を先決問題とする中共側の主張とは容易にその妥協點を見出し得ず、交渉は屢々停頓狀態に陷つた。

この間、國共兩軍の衝突はますます擴大され全面的內戰の危機さへ叫ばれるに至つた。

然るに極東の禍亂擴大による世界平和への脅威を憂慮したトルーマン米大統領が、十二月中旬、中國の統一と民主化を要望した米國の對華政策を闡明し、マーシャル元帥を大統領特使として重慶に派遣して國共調停に乘り出させるに及んで事態は急轉した。

十二月末、マーシャル米特使を迎へた重慶では、新たに同特使を加へ國府側張群四川省主席、中共側周恩來副主席で軍事三人委員會を形成し、先づ國共兩軍の全面的停戰について協議した

が、翌四六年一月六日に至り交渉は遂に妥結點に到達し、九日夜半、蔣介石國府軍事委員長の名を以て、國共兩軍に「軍事衝突停止令」が下達され、十日の政治協商會議開會の劈頭、蔣氏より各黨各派の代表に對してこの旨が發表された。

同命令は舊東三省を除く全中國の國共兩軍に對して適用され、一月十三日を以て完全停戰日と定めたのであるが、其後も命令の不徹底から國共衝突が絶えなかつたので、同日北平に停戰實現機關として設置された國府陳介民軍委會總務廳長、中共葉劍英總參謀長、米ロバートソン代理大使の三委員から成る軍事調處執行部より、華北、內蒙、滿洲の各地に停戰執行小組を派遣し、且つ飛行機によつて停戰命令の傳單を撒布したりして完全停戰の實施に努力した結果、一月二十五日には朱德氏が「中國は十八年來嘗てない平穩な日を迎へた」と記者團に語るに至つたのである。

(二)　裁　兵　整　軍

政治協商會議においても、中共軍の國軍化と國共兩軍の裁兵問題が討議されたが、結局軍事三人委員會（國府側は政協會議中より張群氏に代つて張治中西北行營主任、四月一日國民參政會終了後は陳誠軍政部長、同月末より徐永昌軍令部長）によつて其の細目を決定することになり、引き續き裁兵整軍の具體的辨法を練りに練つた結果、二月二十五日に至り「國共兩軍の統合ならびに裁兵に關する協定」を完成し、正式に調印を了した。

協定の要旨は、今後一年六箇月の間に約三百箇師の國民黨軍を整編して五十箇師にするが、中共黨軍もこれに對應して民兵を含む約三百萬の大軍を同期間內に僅か十箇師に減じて國軍に編入されるといふのである。

中國の和平統一と民主憲政の實現のためにはどうしても此の協定はそのまま實踐されねばならぬが、既に現實に三百萬の武裝兵力を擁してゐる中共黨軍が僅か一年六箇月を出でずして全面的にその堅固な地盤を放棄し、二十年に垂んとする鬪爭の歷史をも一擲して國府の統制下に入り得るや否やは疑問である。

要は民主憲政が如何に實現されるかにかかつてゐるのであるが、從來の如く一方が他方を制御、しこれを吸吸するといふやうな觀念が國共兩者の間に拂拭され切らぬ限り、本協定の完全なる實現は覺束ないであらう。

停戰命令の埒外に置かれ滿洲各地における國共相剋の激化と重慶延安間の依然たる政治的かけ

ひきの應酬は、さらにその前途に暗影を投ずるものである。」

ここでは單に本協定に定められた一九四六年二月二十五日より一箇年及び一箇年半後における國共兩軍の配置表を掲げるのみに止める。

一箇年後　國共兩軍配置表

(地域別)	(黨派別)	(軍)	(師)
滿洲	國民黨	五	十五
	共產黨	一	三
西北	國	五	十五
	共		
華北	國	三	九
	共		
(十一個軍)	國共混成 國	四	十二
	共	四	十二

華中	國	九	二七
(十個軍)	共	一	三
華南	國	四	十二
(四個軍)	共		
合計	國	三十	九十
(三十六個軍)	共	六	十八

一年六箇月後　國共兩軍配置表

(地域別)	(黨派別)	(軍)	(師)
滿洲	國	四	十二
	共		
(五個軍)	國共混成		
西北	國	一特別編成軍	二
(三個軍)	共	三	九

華北（六個軍）	國	二	六
	共	—	—
國共混成	三特別編成軍 國	三	九
	一特別編成軍 共	一	二
華中（六個軍）	國	三	九
	共	—	—
國共混成	一特別編成軍 國	一	二
華南（二個軍）	國	二	六
	共	—	—
合計（十四個軍 六特別編成軍）	國	十四	五十
	共	—	十
國共混成	六特別編成軍 共		

B、中共軍の現勢

毛澤東氏は一九四四年末に發表した「一九四五年の任務」において『中共は本年九月現在で六十五萬の正規軍と二百五十萬の自衛隊を有するが、現在中共地區に九千萬の人口を擁してゐる狀況からすれば、その五%に當る四百五十萬の民兵を常備することは可能だ』と述べてゐる。

やゝ正確な調査は同年十一月現在の中共正規兵力の概算を次の如く傳へた。

○第十八集團軍		一八五、〇〇〇
（內譯）晉察冀邊區軍		三〇、〇〇〇
魯蘇豫同		四五、〇〇〇
晉冀魯豫同		四〇、〇〇〇
晉綏陝甘寧同		七〇、〇〇〇
○新四軍		四〇、〇〇〇
（內譯）一——七師		三五、〇〇〇
浙東遊擊縱隊		五、〇〇〇

◎合　計　二二五、〇〇〇

このほかに華北のみで遊擊隊六十萬、農民武裝隊または自衛隊を含めれば二百萬に達すると推定された。

毛氏が六十五萬の正規軍と二百五十萬の自衛隊と發表したのは、この遊擊隊の一半を正規兵力と看做し、自衛隊の數は當時組織過程にあつたものを加へて發表したものであらう。

然し何れにしても八、一五前後に中共黨軍の勢力は飛躍的に擴大されてをり「今や中共地區內には一億五千萬の民衆を擁する」といはれる位だから、常備可能の民兵量が激增し、それに伴つて遊擊隊、准正規軍（地方正規軍）も增え、ひいて正規兵力も漸增しつつあることは事實である。

（一）指揮系統

中共軍は名目上、國府軍事委員會の隷下にあるが、實際の軍事行動は中共中央委員會に屬する中共中央革命軍事委員會（略して中共中央軍委會）の指令によつて行はれてゐる。

中共中央軍委會には國府軍事委員會駐第十八集團軍高級連絡參謀が派遣されて國共間の連絡に當ることになつてゐるが實際は有名無實である。

現在中共中央軍委員會主席は朱德、副主席は周恩來、總政治部主任は鄧少萍、總參謀長は葉劍英氏で、軍事委員には徐向前、賀龍、毛澤東、陳毅、王稼穡、景振鐘、徐海東、彭德懷の八氏がなつてゐる。

この中共中央軍委會の下に第十八集團軍と新編第四軍（成立當初は第四路軍）とがあり、更にその下に各邊區軍區（師、中央直轄機關、學校等）軍區（師、獨立旅、縱隊等）軍分區（旅、支隊等）分區（團、獨立營基幹隊等等）の順で設けられてゐる。

この指揮系統を表示すれば次の通りである。

（二）第十八集團軍

第十八集團軍總指揮部は從來延安にあつたが終戦後軍事教育機關とともに張家口に移つた。

總司令は朱德、副總司令は彭德懐、總參謀長は葉劍英、副總參謀長は滕代遠、總政治委員は姚中明、總政治部主任は羅瑞卿、同副主任は陸定一氏で、その下に一一五師（陳光）一二〇師（賀龍）一二九師（劉伯承）及び其の系統部隊を基幹として設置された魯蘇豫、晉綏、陝甘寧、晉察冀、晉冀魯豫、冀熱遼の六邊區軍區及び平津直轄軍區があり、その下には塞北、晉西北（以上晉綏）冀西、邊區直轄、平西、平北（以上晉察冀）冀魯豫、冀南、太行、太岳（以上晉冀魯豫）冀熱、遼東（以上冀熱遼）膠東、渤海、山東（以上魯蘇豫）の十五軍區（なほ滿洲方面において若干の新軍區を建設中といはれる）と太岳縱隊（獨立第一師）山東縱隊、第二縱隊、留守兵團、河防司令部などがある。

總指揮部にはまた華北軍政委員會（書記彭德懐）軍政大學總校（校長徐向前）が附設されてをり、華北軍政委員會の下部機構である魯蘇豫皖軍政委員會（書記朱瑞）晉察冀軍政委員會（書記聶榮臻）晉冀魯豫軍政委員會（書記鄧少萍）がそれぞれ各邊區に附設されてゐる。現在魯蘇豫邊區軍區（一一五師基幹）の司令は林彪（前抗大校長、元一一五師長）氏で、政治委員朱瑞、政治部主任蕭華氏がこれを助けてゐる。

その下の山東軍區（第一縱隊）の司令は羅榮恒、政治委員黎玉、參謀長羅舜初、政治部主任蕭華（兼）氏で、傘下に九軍分區、五旅、三支隊を擁してゐる。渤海軍區（舊冀魯軍分區及清河軍分區）の司令は邢仁甫、政委は張國華、政主は蕭斌州氏で、傘下に七軍分區、一旅二獨立團を擁してゐる。膠東軍區の司令は許世友、政委は李嘉慶氏で、傘下に四軍分區、一旅一支隊を擁してゐる。

また山東縱隊の司令は張繼武氏である。

晉綏邊區軍區司令は呂正操（元冀中軍區司令）政委は關向應氏だが、本邊區軍區は終戦後舊晉綏陝甘寧邊區の中から塞北、晉西北の兩軍區を貫つて分離したものである。

晉西北軍區の司令は從來賀龍氏（一二〇師長、晉綏陝甘寧邊區軍區司令）であつたが、終戦後は副司令續範亭氏（抗日新軍司令）が昇格してゐる模樣である。同軍區の傘下には四軍分區、一抗日新軍、一特別師、五縱隊、四遊擊支隊などがある。

塞北軍區の司令は姚喆、副司令は郭鵬氏でその下に雁北、大青山の二支隊と四軍分區を擁して

ゐる。

陝甘寧邊區軍區司令は賀龍、代理司令蕭勁光、政委關向應、政主高崗、參謀長徐向前氏で、關中、隴東、三邊、綏德の四軍分區を直轄し、留守兵團（司令蕭勁光、政委莫文驛、政主高朗亭、參長曹季懷）河防司令部、一旅、一保安隊を擁してゐる。

晉察冀邊區軍區司令は聶榮臻、政委程子華政主舒同、參長唐延傑氏で、その下に五軍分區より成る冀西軍區（司令聶榮臻、參長唐延傑）と五軍分區、一回民支隊、一東進總隊より成る邊區直轄軍區（舊冀中軍區、終戰後冀南軍區と合して冀中南軍區となれりとの報もある）及び舊第十一軍分區に據る平西軍區（司令黃守發、政委同、政委潘峰、參長徐德操）ならびに第十二軍分區に據る平北軍區（司令譚國翰、政主段蘇權）がある。

本邊區軍區は中共が夙にその東北進基地たらしむべく模範邊區軍區として培養してきたところで、終戰後同邊區軍區司令部は邊區政府とともに逸早く河北省阜平縣より張家口に移轉した。

晉冀魯豫邊區軍區（一二九師基幹）の司令は劉伯承、副司令王樹生、政委鄧少萍、政主蔡樹藩、參長李達氏で、その下に三軍分區、一支隊より成る獨立第一師（別名太岳縱隊、司令陳賡、政委薄一波、政主王新亭、參長畢占雲）及び六軍分區より成る太行軍區（司令劉伯承）六軍分區一警衛營より成る冀南軍區（司令陳再道、政主劉志堅、參長王瀘瑞）四軍分區、二支隊、一獨立團、一騎兵營より成る冀魯豫軍區（司令は第二縱隊楊得志、政委蘇振華、政主唐亮、參長盧紹武）がある。

本邊區は中共の「鐵軍」と謳はれる一二九師を基幹とし、猛將劉伯承司令の下に歴戰の闘將猛士を控へ、隣接する國府第一戰區に嚴然睨みを利かしてをり、終戰後屢々北上する中央軍を擊破し、新たに國府の傘下に入つた舊南京政府軍にも相當の打擊を與へて今日に及んでゐる。

冀熱軍區（舊冀東軍區）を母胎として一九四四年末に成立した冀熱遼邊區軍區の司令李雲昌氏は政主を兼ね、政委李楚離氏らとともに東北地盤の擴大强化に懸命の努力を拂つてゐる。

新解放地區の都市工作に主眼を置いて終戰後に設けられた平津軍區の司令は彭德懷氏が自らこれに當つてゐるといはれるが、その內容は未だ明らかにされてゐない。

（三）新四軍

一九四一年一月の皖南事件で解體させられた新編第四軍は、其後國府軍委會の再建不承認方針を排して當時の第一師長陳毅氏を軍長に、參謀長張雲逸氏を副軍長に据ゑて、政治委員劉少奇、

政治主任朱毅、參謀長瓢傳珠氏らを中心に着々再建工作を進めた結果、現在では、正規兵力約五萬、遊擊隊約二十萬、民兵數十萬を擁し、長江下游より山東南部に亘つて隱然たる大勢力を扶植するに至つてゐる。同軍の下には七個師と一遊擊縱隊とがあるが、更に各師を基幹に二邊區軍區、七軍區が設けられてゐる。

すなはち蘇皖邊區軍區の下には第一師（長粟裕、政委饒漱石、政主鍾期光、參長劉炎—三旅、一警衛隊、一聯防義勇軍）を基幹とする蘇中軍區（司令兼政委粟裕、政主兼參長鍾期光—四軍分區）と鹽阜軍區（內容不明）、第二師（長羅炳輝、政委譚震林、政主郭樹勛、參長周俊鳴—三旅）を基幹とする淮南軍區（司令楊梅生、政委劉順元、政主候政、參長趙俊—二軍分區）、第三師長黃克誠、政委楊純、政主吳文玉、參長洪學和—四旅）を基幹とする蘇北軍區（司令黃克誠、副司令張愛萍—二軍分區）、第四師（長彭雪楓、政委鄧子恢、政主吳子團、參長張震—三旅）を基幹とする淮北軍區（司令彭雪楓、政委劉子久、政主劉作孚、參長白浪—三軍分區、一直屬分區）第六師（長譚震林、政主陳兆康、參長夏光—三旅）を基幹とする蘇南軍區（司令鄭沛雲—三軍分區）、第七師（長曾希聖、政委李志高、政主何偉、參長孫仲德—一挺進縱隊、一聯防司令部）を基幹とする皖中軍區（司令等は師に同じ）がそれぞれ設けられてゐる。

また第五師（司令李先念、政主任質斌、參長劉少卿—三旅）を基幹として設置された豫皖鄂邊區軍區（司令等は師に同じ）には何れも三軍分區より成る鄂皖、豫鄂の兩軍區があるといはれる。

なほ浙東遊擊縱隊（司令何瑞、政委譚震林）の下には三支隊、一教導隊、一獨立大隊、一特務大隊が設けられてゐる。

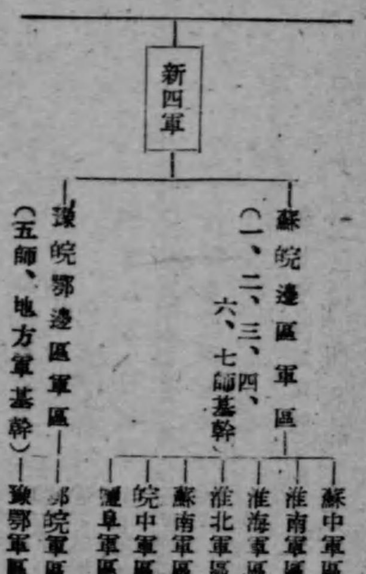
終戰直後、國府軍委會は再び新四軍の長江一帶より華北方面への移駐を嚴命し、陳毅氏は華中民衆に袂別聲明を發表して九月中旬、麾下部隊を山東方面に移動し始めたが、浙東遊擊縱隊が太湖北方に渡らんとした時、舊國府第三戰區軍がこれを急襲し、皖南事件の再來を思はせる激戰が展開されたので、これに憤激した陳司令はさきの袂別聲明を取り消し、全軍の華中引き揚げを中止するに至つた。其後湖北々部の襄陽、樊城を圍み、江蘇中部の鹽城を急襲し、蚌埠東南六十哩の戰線で中央軍と交戰したのは皆この新四軍である。陳氏はまた四六年初頭山東省泰安縣に入り、東北に向つた林彪、陳光氏らの後を承けて魯蘇豫邊區軍區をもその指揮下に掌握したと傳へられてゐるから、袂別聲明の取り消しにも拘らず、新四軍はやはり從來の江南戰線を一應整理し專ら江北、舊黃河以南を固め出してゐるのは事實であらう。

なほ以上の外、廣東方面には四個支隊より成る瓊崖赤色自衛隊があり、すでに十數萬の民衆武裝化に成功して華南の赤色地帶擴大に活躍し、九龍半島より海南島方面でも「八路軍」または「新四軍」を稱する部隊と國民黨系軍隊の衝突が報がられてゐる。

如上の中共邊區軍區及び軍區を表示すれば次の通りになる。

○中共軍區編成表

- 中共中央革命軍事委員會
  - 第十八集團軍
    - 晉察冀邊區軍區
      - 冀西軍區—一、二、三、四、五各軍分區
      - 直轄軍區—六、七、八、九、十各軍分區、回民支隊、東進總隊
      - （一一五師別動隊基幹）
      - 平西軍區—十一軍分區
      - 平北軍區—十二軍分區
    - 晉冀魯豫邊區軍區
      - 太行軍區—一、二、三、四、五、六、七、八各軍分區
      - 太岳軍區—一、二、三、四、五各軍分區
      - 冀南軍區—一、二、三、四、五、六、七各軍分區
      - （一二九師、獨立一師基幹）
      - 冀魯豫軍區—一、二、三、四、五、六各軍分區
    - 魯蘇豫邊區軍區
      - 山東軍區—魯中一、二、三、四、魯南一、二、三、四、濱海各軍分區
      - 渤海軍區—冀魯一、二、三、清東、清西、清中、清北各軍分區
      - （一一五師、山東縱隊基幹）
      - 膠東軍區—東海、南海、西海、北海各軍分區
    - 晉綏邊區軍區
      - 塞北軍區—一、四、五、七各軍分區
      - （舊冀察熱邊遊擊基幹）
      - 晉西北軍區—二、三、六、八各軍分區
    - 冀熱遼邊區軍區
      - 冀熱軍區—十三軍分區
      - （舊冀東軍區軍基幹）
      - 遼東軍區—十六軍分區
    - 陝甘寧邊區軍區
      - 陝甘寧軍區—三邊、綏德、關東、關中各軍分區
      - （一二〇師基幹）



第四章　領袖列傳

毛澤東

中國共產黨中央政治局主席毛澤東氏の生涯を語ることは中共の歷史を紹介するのと同じだ。それほど彼は中國共產黨の中核的存在であり、少くとも過去十數年間の中共のあらゆる政策と動向ばことごとく彼の腦中樞を濾過して出て來たと言つても差支へない。その「中共の生きた歷史」といはれる毛澤東とはどんな人物か。一九四〇年モスクワから延安に入り、彼と同志的な接觸を持つて、一九四六年一月歸朝した日本共產黨の野坂參三氏は彼について次のやうな感想を語つてゐる。

『毛澤東氏は一口に言へば偉人だ。昨年或る外人記者が延安で毛氏と會つたあとで私に「毛澤東に會つた印象は中國の他の誰よりも優れてゐる。」とさゝやいたことがあるが、私も中國にこれ以上の人物がゐるとは思へない。彼は哲學、政治、經濟各分野における黨內最高最大の理論家であり、マルクス・レーニズムに關するあらゆる文獻の讀破はもとより、その日その日の新聞にいたるまで實に克明に讀むといつた非常な勉强家だ。それは彼が單なる學者や理論家でなく、刻々の情勢を絕えず檢討し、批判するといふ政治家としての素質を表はしてゐる。そして彼は「一日新聞を讀まない者は批判されねばならない。三日新聞を讀まない者は罰せられねばならない。」と黨員をいましめてゐる。しかも彼はあらゆる事から眞實を學びとることを知つてゐる。彼にとつては市井の雜事も、眼に一丁字のない農民も貴重な教師である。』

彼は湖南省湘潭縣下の韶山といふところに、一八九三年に生れたといふから今年とつて五十四

歳の働き盛りだ。父は貧農の出身で、後に小さい商賣をし、土地を買つて小地主になつた。非常な勤勉家で、少年毛澤東も六歳のときから野良仕事をさせられたといふが、澤東は村の小學校を卒業して省城のある長沙へ行き私立中學に入つた。この頃辛亥革命の時代の波は長沙の學生達を熱狂させ、中學生のうちでも澤東は眞先きに辮髪を剪つて、滅滿興漢の革命軍に投じ、半年間兵士生活をしたりした。それから改めて二十一歳のとき省立第一師範學校に入學し、一九一八年、二十六歳で卒業するまでに彼の一生の方向が決つた。彼はここで陳獨秀等の主宰した北京大學の「マルクス主義研究會」や雜誌「新青年」の影響を受け、彼もまた湖南に「新民學會」といふ社會主義團體をつくつた。當時ロシア革命の影響は中國のインテリ層にマルクス主義に對する關心を呼び起しつゝあつたが、それは先づ北京大學を中心とする中國最初の共産主義運動となり、毛澤東もまたこの頃既に湖南にあつて學生運動でその組織力を發揮し、「湖南王」の綽名があつたといふ。師範學校を卒業して北京へ志した。こゝで彼は北京大學の圖書館事務員となり、傍ら哲學會、新聞學會に關係して哲學、歴史、經濟學等の書籍を讀みふけつた。「共産黨宣言」、「階級鬪爭」（カウツキー）、「社會主義史」（カーカツブ）の三書が彼を完全なマルクス主義者にしたと彼自ら語つてゐる。後に彼は長沙に歸つて政治活動に入つてゐたが、一九二一年上海で開かれた中共一全大會には湖南代表として出席、中共黨員としての活動が始まつた。

第一次國共合作時代には汪精衛國民政府主席、蔣介石黄埔軍官學校長の廣東政府で一九二六年中央宣傳部長代理（本任は汪精衛）兼中央政治訓練班理事となつたこともあるが、毛氏が黨内に覇權を確立して行つた素地はその農民運動の指導と農村問題研究にあつた。一九二七年湖南省で「秋收暴動」を指導した彼は革命運動に農民軍の必要を痛感し、三千の軍隊を組織して江西省に入つたが、これが共産軍の濫觴であり、一九二八年游擊して來た朱德將軍の部隊と合して工農紅軍第四軍を組織した。いはゆる朱毛軍がこれで、瑞金ソヴェート政府の武力の骨骼となつたのだが、この頃から彼の黨内における地位は不動のものとなつて行つた。一九三四年から三五年にかけて紅軍大西遷の苦難期を經て、一九三六年の西安事件を契機とする第二次國共合作と抗日戰の發動、その他今日にいたるまで、すべてが毛氏の弛みなき領導下に推移してゐることは言ふまでもない。

彼の私生活は下級兵士と全く同じで、エドガー・スノー氏は〝支那の赤い星〟の中で彼の「財産」は數枚の毛布と二着の綿服に過ぎなかつたと書いてゐる。或るとき外人記者が彼とインターヴューするために延安市内の住宅を訪れたが、不在なので街を歩いてゐると向ふから身なりのき

たない農夫と大聲で談笑しながら歩いて來るこれも身なりの粗末な綿服の男がゐた。これが中共主席毛澤東氏だと聞いて、餘り無雜作なのに驚いたといふ話が傳へられてゐる。彼は實によく談じ、よく他人の言ふことに耳を傾ける。暇を見ては農民や勞働者の間を歩き、彼等と漫談することが彼の慰安だといはれるが、じかし彼はその中から、民衆は何を欲してゐるかを學びとつてゐるのだ。彼は決して怒らない。反幹部派の黨員が毛氏に非難を集中したときも彼は一言もそれに反駁せず、自分の政策を罵り攻擊してゐる壁新聞を熱心に熟讀してゐたといふ。そこから彼の科學的判斷が生れ、果斷な實行力となるのであらう。『マルクス・レーニン主義は客觀的事實より生產され、且つ客觀的事實に對して實證し得る最も正確、最も科學的な革命的眞理である。』と言つた彼自身の言葉の如く、彼は冷嚴な客觀的事實から最も多くを學び取ることを知つてゐた。彼の正確無比な對日抗戰段階論から新民主主義論の劃期的な論策も、このやうな態度と天才的な頭腦の所產であらう。

"支那の赤い星"によると、彼は中國の一般農民と同じ單純な自然な態度でよく笑ひ、その笑顏は"自分の眞念にいさゝかも動搖のない子供のやうな笑ひだ"といふ。抗戰中二部屋しかない洞穴で穴居生活をしてゐた彼は一日十六時間働き、寢るのはいつも明け方近かつたさうだ。それは瑞金時代、絕えず戰鬪の指揮をとつてゐた頃からの習慣だといふが、重要會議は洞穴の一部屋の圍爐裏の傍で開くといつた簡單な生活、そして彼は無類の讀書家で雄辯家である　彼の演說會は街の廣場などで聞かれ、數千人の群衆が集つて聽くが、それは大獅子吼ではないがどんな學問のない百姓でもよく納得の行くやうに民衆の政治、新民主主義の政治を說いて行く。その親しみのこもつた調子には中國語の判らない日本人（戰時中の日本人解放聯盟の人達）でも聞き惚れたものだといふ。

しかしさうした反面、彼はスターリンの"血の肅正"にも比すべき部內の肅正を斷行したこともある。一九三一年江西ソヴエート區に起つた「富田事變」と稱されるものがそれだが、當時反對派の反亂行爲を鐵腕を以て彈壓し、一連の肅正工作で屠殺した數は一萬以上といはれた。彼はこの年以後完全に中共の實權を握つた。

周恩來

コンミユニスト・ナンバー2として外人の間にもその名聲を喧傳されてゐる周恩來氏は江蘇省淮南の產で、一八九八年生れだから本年四十九歲の働き盛りである。周氏の現在のポストは中共

中央政治局副主席とともに中共軍事委員會副主席の要職を兼ねてをり、毛澤東、朱德兩氏とならんで延安三人男の一人として幅を利かしてゐるのであるが、最近の彼の仕事は重慶に頑張つて國共交渉の折衝役を勤めてをり、困難な國共關係の打開につとめ、黨内でも異色ある人物となつてゐる。

周氏は十三歳のとき出生地を出て滿洲奉天へ赴き、十五歳のときには辮髪をきつてゐる。ついで天津にいたり、同地の南開中學に入り、同校で四年間學んだのであるが、在學中すでに彼は學生リーダーとして革命運動に多大の關心を寄せてゐた。一九一七年日本へ渡り、一年半にわたつて早稻田大學ならびに日本大學の聽講生として當時の先進國日本に學んでゐる。歸國後、彼は天津の南開大學に入學、そこで學生新聞の編輯を擔當してゐた。一九一九年、五、四運動が學生運動として北京にまきおこされると彼は直ちに學生デモにリーダーとして參加、このとき早くも官憲によつて逮捕、投獄される經驗を味はつてゐる。釋放されると彼は『醒社』と云ふ思想團體に加入し、このとき同じメンバーであつた鄧穎超氏（のち周氏と結婚、黨の婦人部長として、また最近も周氏とともに重慶に現はれて活躍）と相識るにいたる。一九二〇年、フランスに渡り、同地に二年滯在、ついでドイツにも一年留學する。この時代に周は共產主義青年團に加入し、中共に關係することになつた。一九二四年、フランス留學から歸國し、廣東に行き、同地の黨地方委員會書記に任命された。と同時に當時は第一次國共合作時代で、廣東を中心に中共が國民黨と手を握つてゐたころなので周は蔣介石校長の下に黃埔軍官學校の政治部主任代理となつて、黃埔系の武官に赤い思想を吹き込んだ。

一九二五年、蔣介石氏の第一次クーデターが廣東で斷行され、當時汕頭にゐて、何應欽將軍の下に三個師團を指揮してゐた周氏も逮捕されたが、周は學生の間に大した人氣をもつてゐたので許された。そして蔣介石氏の北伐に國民革命軍を援けて活躍すると同時に一方國民革命軍内において黨（中共）工作の責任者となり、中共の勢力を著しく强めたのであつた。　黃埔軍官學校時代には同校教官であつたガロン（のちのソ聯極東軍司令官ブリュッヘル將軍の變名）およびその他ソ聯系軍事教官について戰略、戰術を學び、のち紅軍の指導者となる素地をこゝでつくりあげた。

一九二七年はじめ、周氏は上海に現はれ、勞働者暴動を成功的に導き、國民黨軍隊の上海占領を容易ならしめるに功があつた。その當時の彼は武裝勞働者五千と工人糾察隊八萬を掌握してゐた。ついで同年、蔣介石氏が上海で反共クーデターを敢行し、國共袂を分つにいたり、周氏も上

海警備司令白崇禧によつて逮捕され、危く死刑に處せられるところであつたが、白麾下の某師長の情で又もや釋放され、命拾ひをした。

國共の分離に伴つて、周氏は武漢に赴き、黨（中共）の軍事部長に就任した。中共が汪精衛ら國民黨左派とも最後的に分裂し、漢口を退去し、それから中共の地下工作時代に入るやまづ南昌で賀龍、葉挺を操つて所謂八、一暴動をおこさせ、革命委員會を樹立し、紅軍參謀團の主任參謀となつた。そして東江の一戰で敗れた彼は紅軍を率ゐて汕頭に逃れた。一九二八年のコミンテルン六全大會には中共代表として、また一九三〇年には紅軍代表として周氏はモスクワを訪れてゐる。

毛澤東氏を主席とする中華ソヴエート政府が一九三一年、瑞金に成立すると同時に、周氏も江西に入り、中央政治分局を組織してその書記となつた。さらにその後朱德軍の政治委員となる。國民黨の對中共軍第四次攻擊後、瑞金に歸り、軍事委員會副主席となる。一九三四——三五年の西遷には途中で病を得てゐる。

一九三六年末の西安事變で蔣介石氏が張學良のクーデターに遭ひ監禁されるや、周氏は早速西安に乘込んで、蔣氏を救出するとともに國共第二次合作を蔣氏に迫つて實現さす藝當を演じ、周氏の政治的手腕が俄然西安事變以來認められ、同時に國共交渉のその後の立役者となる。

支那事變勃發後、周氏は主として重慶にゐて、中共と國民黨との連絡係をつとめてゐたが、一九四二年、國共關係が險惡化するとともに延安に引きあげ、董必武氏が周氏の役を果すことになつた。

一九四五年終戰後、ハーレー米駐渝大使の斡旋で國共交渉が再開されるや、周氏は延安代表として重慶に乘込み、王若飛氏とともに國民黨の王世杰、張群、邵力子諸氏と交渉をすゝめ、遂に毛澤東氏の重慶出馬となり、蔣毛會談の結果、十月十日、双十協定の初歩的な妥結が國共間に成立した。しかし國共關係はその後も軍事衝突を中心とし、交渉の進捗は遲々として運ばなかつたが、周氏はこの間重慶、延安を飛び、纏め役に奔走、本年一月はじめには米特使マーシャル元帥の來華に伴つてマーシャル、張群兩氏とともに周氏は三人委員會をつくり、國共武力衝突の停戰協定を結ぶことになつた。

ついで重慶において、一月十日國民黨、中共、その他各黨派代表による政治協商會議が開かれるや、周氏は中共代表となり、和平建國綱領の創設に努力した。しかし周氏の奮鬪にも拘らず國共間の具體問題は解決せず、ことに滿洲を中心とする現地紛糾はいよ〳〵繁くなり、三月一日か

ら擧行された國民黨の二中全會はこの空氣を反映して、反共的色彩が濃化し、政協の決議が中共の解釋とは反對に國民黨側に有利に實行されんとする傾向が顯著となつたので、中共側ではこれに憤慨し、周恩來氏を重慶から引きあげさすとともに三月二十日から重慶で擧行された參政會に對しても參政員たる周恩來氏以下中共代表は出席を拒否し、國民黨反對のゼスチュアを示した。その後も周氏は國民黨宣傳部長吳國楨氏との間に互に宣傳戰を演じ、國共交渉における花形となつてゐる

以上のやうに彼の經歷は國民黨との交渉に關する部分が多く、一時は國民黨に通謀したとのデマが飛んだこともあつた位であるが、黨内の彼の地位は最近いよ〳〵揺ぎないものとなつてゐる。

朱　德

中共中央革命軍事委員會主席、國民革命軍第十八集團軍總司令として中共の軍權を掌握し、民兵を含む三百萬の大軍に號令する一方、中共中央委員、同政治局委員として黨政の最高峰にも立ち、毛澤東氏と共に中共黨軍の二大支柱を成してゐる朱德氏の名を知らぬ者は我國に於ても少いであらう。

延安や各邊區政府の會議室中央正面には必らず朱毛兩氏の肖像が掲げられてゐて、國父孫文と蔣介石氏の肖像を掲げる國府治下各級政府のそれと好個の對照をなしてゐる。

氏は雲南生れと傳へられたこともあるが、實際は四川省儀隴縣の馬鞍莊出身といふのが正しい。氏の生年に關しても從來は一八七八年と一八八六年の二說があつたが、本年二月延安で朱氏に會つた米人記者は、氏が蔣介石氏と同年の六十一歲であることを報じてゐるからここでは一八八六年說を採る。

彼の生家は貧しい小作農で十歲位の時一家離散の憂き目に遭ひ、富裕な叔父の家に預けられた。

彼はそこで古風な家庭教育を受け、小學校にも三年通つた。それからある中學に半年、成都の體育學校に二年ほど學んで一時鄕里の小學校の體操教員をやつた。

一九〇九年二十四歲の時、昆明の雲南講武堂第二期生に入學、辛亥革命のあつた一一年に卒業し、都督蔡錫に從ひ四川で清朝側の趙爾豐軍と戰つた。翌年講武堂の生徒隊長、一三年には大隊長として佛印國境に派遣され、ゲリラに秀でた同地の土民軍を對手に備さに辛酸を嘗め、後年の

「朱德游擊戰術」の基礎を會得した。

一五年、若くして聯隊長となり討袁革命に參加して四川の袁世凱軍と戰つた。袁はこの時人を派して五十萬元を贈り、蔡に對して叛旗を翻さんことを求めたが彼は應じなかつた。

二〇年昆明に歸り、時の督軍唐繼堯の政敵たる顧品珍と通じて唐を驅逐し、二一年昆明の警察廳長となつたが、間もなく唐が再起して昆明に攻めこんだので、彼は一個中隊を率ゐて逃亡し、西康を經て四川に入り、四川軍閥劉湘麾下の重慶警備司令楊森の許に投じて師長となつた。然し以前四川でおぼえた鴉片がだんだんひどくなつてゆくので、間もなく斷然意を決して四川を辭し、上海に下つて鴉片をやめる療法をしてこれに成功した。

二二年、朱培德、金漢鼎らとともに雲南軍を率ゐて廣東軍政府に投じたが、こと志と違つたので同年十月伯林に留學し、一年間ドイツ語を勉强してから、ゲッティンゲン大學で社會科學を聽講した。そこで李立三らが創立し、當時周恩來氏がリーダー格になつてゐた中國共產黨旅法（フランス）支部の留學生仲間と知り合ひ、多年の思想的煩悶を解決すべく入黨した。

二六年アメリカを經て歸國すると中共は彼を四川における軍事活動の責任者に任命したので、もとの緣故をたどつて楊森の許に投じ、楊軍を國民革命軍第二十軍にすることに成功し、同軍の黨代表として蔣介石氏の北伐に參加した。其後、南昌の軍官學校長兼公安局長に就任したが、この時の江西省政府主席は雲南時代の同僚朱培德であり、次いで國民革命軍第九軍の副軍長に任命されたが、その軍長は嘗て彼の配下だつた金漢鼎だつた。國民革命軍內における彼は共產黨員なるが故に何時も不遇だつた。

二七年の南昌八、一暴動に際しては、公安局長たる彼は暗默のうちにこれに參加し暴動の進行を有利にしたが、彼の名はまだこの時の革命委員會首腦部の中に現はれてゐなかつた。

暴動後第九軍が組織され葉挺氏が軍長に、朱氏が副軍長になつた。

彼が眞價を發揮し始めたのは廣東コムミューンに際し「工農紅軍第一師」を組織し、江西で毛澤東氏の農民自衛軍と合流して「工農紅軍第四軍」を編成してその軍長になつてからである。

其後の彼の經歷はそのまゝ中共軍の歷史であり、ここに贅述する要を認めない。

彼の日常生活は極めて質素であり、抗戰の勝利後も相も變らぬ延安郊外の洞窟住ひを續けてゐる。

彼は常に古くなつて色の褪せた軍服とやはり着古した毛皮の襟のマントをひつかけてゐる。江西時代からその名を聞けば泣く子も默り、國府側から嘗てその首に二十五萬ドルの賞金がかけら

れた朱氏であるが、氏に接する程の者はその明るい好々爺的性格――陰惨な影など微塵もみられぬ溫かい而も極めて親切な人柄に驚を喫するといはれる。

一九四二年頃一時彼の中風臥床説が傳へられたことがあるが、今も頭髪の白さは増しても身體は至づて頑健で、依然として規律正しい軍隊式生活を毎日繰り返してゐるといふ。彼は十七事變後自ら河北、山西、河南の遊擊作戰を指揮したことはあるが、一九四〇年以後は一度も延安を離れたことはない。

然し何かあると直ぐ彼の噂が其處此處に飛び出すのも彼の人物の大きさを示すものであらう。終戰後國共軍事衝突が熾烈化した時にも、中共軍の歸綏攻圍や奉天防衛の陣頭指揮に彼が立つてゐると重慶側から報道されたが、彼はずうつと延安の總司令部にあつて采配を揮つてゐたのである。

二十五の時、雲南で十八の小學教員と結婚し、子供が一人出來たが間もなく細君は死んでしまつた。二番目の細君とも死別した。三番目の細君は廣東省砕石鎮時代に結婚した吳玉蘭女士だが、後に湖南省政府主席何健氏に捉まへられて殺されてしまつた。

現在の夫人は四番目で江西省萬安縣生れ、今年三十四歳の豐滿な肉體美人、康克清女史である。十六の時親の勸める結婚が嫌で逃走し、百人の遊擊隊の隊長になつて井崗山に逃りつき朱德軍に投じた。二九年、十七歳で四十三歳の朱德氏と結婚したものである。女史は三四年萬安縣で國民黨軍の不意打を受けた時、急拵へら三百人の兵士を指揮してこれを擊退してから「女司令」の異名をとつてゐる。

彭德懷

一九〇〇年生れ。湖南省湘潭人。毛澤東氏と同鄉で氏の全幅の信頼を受けてゐる。一八一頁參例の大西遷で張國燾氏らが毛氏から離れた時にも彼は毛氏と行を共にし、終始、影の形に添ふ如く毛氏に跟いて廻つた。

家庭の風波のため九歳にして家を出、鑛夫、徒弟、工場勞働者などとして流浪し、十一歳故鄉に歸つたが湖南省一帶が大飢饉に襲はれた際農民を率ゐて富農の穀倉を掠奪し、再び故鄉を棄てゝ軍隊に入り、十八歳で小隊長、武漢政府時代には何健軍の旅團長にまで累進し、二十七の時には第八軍長劉釗のもとに再び聯隊長となつた。そして二十八の年、當時第八軍の大隊長であつた黃公略氏の紹介で中共に入黨、二十九の時、平江で所謂「秋收起義」をやつて朱毛の紅軍第四軍と

合作し、黄公略氏を政治委員に第五軍を創建して甚の軍衣となり、最初の湖南ソヴエート政府を組織した。なほ黄氏は後に第三軍長となつたが、三二年江西で陣沒した。

三〇年紅軍の主力部隊として何健軍を破つて長沙を占領し、瑞金政府樹立されるやその中央執行委員に任ぜられた。

西遷に當つては彼は陝甘支隊總指揮（政治委員は毛澤東氏）となり、毛氏の虎の子部隊を率ゐて四川、甘肅省境の大草原を突破し、甘肅、寧夏、綏遠を迂回して陝北に入り、今日の中共軍の基礎を作り上げた。

七、七事變勃發し三七年八月紅軍が第八路軍に改編されるやその副總指揮となり、一八一師長を兼任した（一八一師は第十八集團軍成立の際、國府軍事委員から公式には認められなかつた）抗戰中は屢々華北の第一線に現はれて作戰を指揮した。

現在彼は中共中央委員、同軍事委員、華北軍政委員會書記、北方局軍事部長及び終戰後の新設平津直轄軍區の司令などを兼ねてゐるが、部内の青年層からも極めて受けがよく、名實共に朱德氏の第二任者に目されてゐるといはれる。なほ一九三九年には國府軍事委員會の委員にも任命されてゐる。

董必武

一九四五年四月開かれた中共七全大會で中央政治局委員に新任された董氏は、一九四六年一月の政治協商會議にも中共代表として出席したが、彼は中日事變勃發以來、中共の駐重慶代表として國民政府との連絡役をつとめてをり、一八八六年生れ、湖北省黄安縣の出身である。武昌中學卒業後、同盟會に加入、第一革命の武昌擧兵に參加。一九一三年、日本へ渡り、法政大學に學び、一九一五年歸國。一九二〇年、武漢中學を創設する。同年湖北共產黨組織の創立委員となり、翌年中共の創立に參畫し、第一回黨大會代表に選ばれた。一九二六——二七年の國共合作當時、彼は國民黨中央候補執行委員、湖北省政府工農廳長などに任命されてゐる。國共分裂後渡日、ついで訪ソ（一九二八——三二年）、歸國して江西ソヴエート區に入り、黨學校を創設して校長となり、ソヴエート政府執行委員を兼任する。中日事變後は重慶國民參政會の參政員に中共代表として選ばれ、重慶に常駐して中共スポークスマンとして活躍、一九四四年の中共駐重慶辦事處總引き揚げのときにも踏み留まり、國民黨との交渉に努力した。一九四五年四月にはサンフランシスコ會議に中國代表として中共側から彼一人が出席、國際舞臺において中共の對外宣傳にこ

れつとめてゐた。

葉劍英

中共中央革命軍事委員會總參謀長兼第十八集團軍參謀長葉劍英氏の名は、終戰後の國共軍事衝突が激化して來た頃から世界的に知られるやうになつてきた。

初めは軍事三人委員會形成前の重慶における國共會談の立役者として、後には停戰執行機關として北平に設けられた軍事調處執行部の委員としてその一擧一動は內外注視の的となつた。

本年一月十三日、國府軍事委員會の陳介民中將と米代理大使の軍委員と共に最後に北平に乘りこんで來て、北京飯店の記者團の前に現はれた時の葉氏は、中山服に黑の短靴とふいでたちで少しも軍人臭味がなく「この邊の治安狀態はどうかね？」などと逆にとぼけた質問をするほどの政治家ぶりであつたといふ。現在、國共兩軍を通じても參謀畑の軍人としては恐らく彼が第一人者であらう。

彼は本年四十三歲、一九〇三年、廣東省東江縣の一商人の子として生れた。雲南講武堂の第十二期卒業生で、卒業後は許崇智の軍隊に入り、二十一、二歲の時、軍人文官として廣東省中山縣、梅縣などの縣長を歷任、一九二六年、周恩來氏の推挽で黃埔軍官學校教官に就任するとともに中國共產黨に入黨した。

北伐當時は蔣介石氏直系の第二十一師長として青年師長の名を謳はれ、一九二七年には張發奎麾下國民革命第四軍の參謀長となつたが、間もなく廣東コムミユニオンに參加して失敗し獨ソ兩國に留學、三一年歸國後は江西中央ソヴエート區に入り、紅軍參謀長、中共中央軍事委員となつた。西遷の際は一時江西に踏み留つて中央軍の追擊を却け、よく殿軍的役割を果したが、其後四川で毛澤東氏に追ひつき、「草地突破」の際は陝甘支隊の參謀長としてあくまで毛氏と行を共にした。

三六年の西安事件には周恩來氏と共に紅軍代表として西安に入り、蔣氏及びその側近と接衝し、事件落着後は中共西安辦事處主任となつた。

七、七事變勃發後は八路軍駐京辦事處主任として一時南京に駐在したこともあつたが、其後、兩廣地方で組織された新編第十九路軍の總參謀長をも兼ね、三八年武漢陷落後、蔣介石氏が中共の提言を容れて重慶に遊擊學校を設け、自ら學校長となるや彼はその下で教育長を勤めた。三九年延安に歸つて現職に就き、國府軍事委員會委員を兼任、中共中央政治局委員の有力メムバーと

して黨政の樞機にも參畫することとなつた。

彼はロシヤ語、獨逸語に堪能で、また經歷が示すやうに國民黨との交渉にも深い體驗を有するので、政治協商會議には中共代表の一員としてこれに參加し、今なほ軍事調處執行部の委員として國共軍事衝突の防遏と裁兵整軍の具體的實踐に活躍中である。

中共部內では周恩來氏と特によく、生來の緻密な頭腦は高く買はれてゐるといふ。

林祖涵（林伯渠）

現在中共中央政治局委員十一名の一員となつてゐる林氏は一八八二年、湖南省醴陵の出身。日本に留學後、辛亥革命に參加し、孫文氏の中華革命黨に加入する。一九二〇年武漢で中共黨員となる。一九二四年には國民黨一全大會に出席し、國民黨中央候補執行委員に選ばれ、一九二五年には國民黨中央農民部長となる。翌年、國民黨二全大會では中央常務委員に選ばる。一九二七年南昌の八、一暴動に參畫し、革命委員會をつくり、財政委員會主席となる。のちモスクワに留學、同地で開かれた中共六全大會に出席する。一九三四年、ソヴエート政府中央執行委員兼財政人民委員となる。西遷後、西北ソヴエート政府財政部長となり、ついで陝甘寧邊區政府主席に任命される。第十八集團軍駐西安代表となり、一九四四年夏、國共交渉の主役として國民黨代表の王世丕、張治中兩氏と渡り合ふ。

葉挺

抗戰中國の內外を震撼した例の皖南事件で葉挺氏が捕へられたのは一九四一年一月十五日だが、それより丸五年を經過した本年一月下旬の政治協商會議の會期中、いよいよ高まる中國民主化の聲に重慶の牢獄から葉氏は遂に釋放されたと傳へられる。

これは終戰後に河北省北部で中共一二九師に捕虜となつた國府河北省主席馬法吾氏（第四十軍長）と交換に釋放されることになつたものといはれるが、葉氏の出獄はいはゞ再び虎を野に放つたやうなもので、馬氏の場合とは比較にならぬ大きな意義を持つものである。

彼の黨內における活動經歷は極めて古く、一九二七年の南昌暴動後には、朱德氏を副軍長とする新編第九軍の軍長に推され、廣東コムミューンでは工農紅軍總司令として活躍してゐる。

彼は廣東人だが年齡は不明である。一九二六年、張發奎軍の第二十四師長時代に入黨した。廣東コムミューン失敗後は一時海陸豐ソヴエート區に遁れ、それから香港に隱れて暫らく世間から

忘れられかけてゐたが、七、七事變後再び中共中央に馳せ參じ、三八年初頭、新四軍軍長に復活、政治局委員をも兼ね、湖北、江西、湖南一帶の舊地盤に據つて活躍し、江蘇、安徽方面にまで地盤を擴大した。

然るに長江下游の地盤問題で何時も國府第三戰區の顧祝同部隊と折れ合ひが惡く、國府軍委會から屢次に亘つて江北移駐を命ぜられ、やむなく手兵一萬を率ゐ、江南の地盤を棄てゝ北上し、一月十二日夜半、安徽省南端に至つた時に突如第三戰區副司令長官上官雲相麾下の七萬の中央軍に包圍急襲され、血戰三日に亘つたが何ぶん不意を衝かれたゝめに全軍潰敗し、彼は捕へられて重慶に送られ、副軍長項英氏は重傷を受けて後に死亡した。

この報に激怒した中共中央は早速何應欽軍政部長以下の責任者の處罰と葉氏らの釋放、新四軍の再建容認を蔣介石氏に要求したが、何れもその容れる所とはならず、たゞ選擇者の寛大な處置を取ることのみが約束され、所謂「軍紀肅正問題」として韓復渠や石友三同樣に處刑される筈であつたのが、漸く死一等を減じて重慶の獄に入れられた。

王若飛氏も全く生命あつての物種で、今日再び日の目を見うる身とはなつたのである。

新四軍は其後陳毅新軍長らの努力により着々再建擴充されて今日に至つてゐるが、釋放後の氏が再び舊地盤に歸つて新四軍の采配を揮ふのかどうかはまだはつきりしてゐない。本年四月初旬に重慶から延安へ歸る途中、搭乘機が墜落したと傳へられるが、詳細不明である。

王若飛

貴州省出身。一九二一年、フランスに苦學生として留學、同地で共青に加入。翌年、周恩來、李立三の諸氏とともに中共フランス支部を創設する。一九二四年、モスクワへ行き、東方勤勞者大學に學び、翌年歸國した。一九二五年、五、卅事變に活躍して、その後黨中央秘書長となる。北伐には周恩來氏とともに國民黨軍に入る。國共分裂後は江蘇省黨部主任委員となり、長沙蜂起には李立三氏とともに指揮にあたつた。一九三〇年には赴ソ、中央の瑞金政府時代にはモスクワでゴミンテルン工作に從事し、翌年歸國した。その後黨内の地位に惠れず候補委員にもあげられてゐなかつたが、一九四五年、中共七全大會において中央委員となり、中央委員會秘書長の要職についた。その後は政界の表面に進出、終戰後は重慶に出て周恩來氏を援けて國共交渉の主人公となり、ついで政治協商會議の代表にも選ばれたが、四月はじめ飛行機事故で墜死した。

陳毅

新四軍の實勢力はなほ華北の一邊區軍程度のものに過ぎないが、中共軍といへば第十八集團軍と新四軍で、新四軍長陳毅氏の名は普通賀龍、徐向前氏ら諸先輩のそれの上に、第十八集團軍總司令朱德氏の名と竝んで掲げられる。

皖南事件後、葉挺麾下の一師長から諸先輩を飛びこして新四軍長の後任に擧げられ、新四軍の再建と華中における中共地盤開拓の重責を負荷された陳毅氏は、當時からその才腕を餘程朱毛兩氏に買はれてゐたものと見える。

新四軍は今日長江下遊に正規、准正規軍、遊擊隊を合して約四十萬と、更に相當數の民兵を擁し、全く京滬周邊を圍繞し去つてゐる。

五年前に殆んど全滅の悲運に陷つた同軍を、日本と汪政權側の馬鹿にならぬ「淸鄕工作」の竹矢來と國民黨系忠義救國軍の壓力に抗しつゝ、新四軍をよくこゝまで盛り上げて來た陳氏の腕は流石に朱毛兩氏の眼鏡を裏切らなかつたものといへやう。

彼は湖北省出身、年齢は確かでないが北伐當時、中學生から從軍したといふから恐らくまだ四十前後であらう。

朱氏が既に耳順を越してゐるのにこれはまた若い總指揮官ではある。

一九二七年國共の分裂後に紅軍に投じたが、大西遷に際しては故項英氏らと共に江南に踏みとゞまり苦しい遊擊戰を續けた。

一九三八年新四軍の成立時には、葉挺軍長項英副軍長の下で第一師長に任命された。

皖南事件後、中共中央より代理軍長に拔擢され、政治委員劉少奇氏と共に蘇北地區に再建の根據を求めて孜々として工作を續け、一九四三年には江蘇、安徽、河南、湖北の四省及び浙東に跨り、麾下七個師、二邊區軍區と數多の軍區、軍分區を擁するに至つた。

この勢は終戰前さらに飛躍的に增大し、上海、南京周邊地區の農村は殆んどその組織下に入り、中共の華中における地盤も牢固として拔くべからざるに至つたのである。

終戰後、國府軍委會の電命により一たん新四軍の江北移駐を決意し、華中民衆に對する袂別聲明を發表し、一部は既に山東方面に入れたのであるが、麾下の浙東遊擊縱隊が北上の途次、中央軍から攻擊されるに及び再び前の袂別聲明を取り消し、移駐を中止した。

然し現在その先鋒部隊は依然として山東南部にあり、陳氏は泰安から國府軍の停戰協定違反を

攻撃した聲明文を發表したり、停戦執行小組の代表に會つたりしてゐる。

陳紹禹

筆名王明で知られる、瞿秋白死後の黨隨一の理論家であり、一九三五——三六年の抗日人民戦線時代には最高の理論的指導者として勇名を馳せた。一九〇七年、安徽省富農の家に生れ、安徽中學を出て上海大學に入り、一九二五年入黨してゐる。同年入ソ、モスクワ中山大學に學び、同校長で中國通のミフに認められ、陳氏は共青モスクワ支部書記となる。そこで同志二十七名を率ひて歸國し、同一派は陳氏以下秦邦憲、張聞天、沈澤民、何子述の諸氏など留ソ學生からなる『二十八宿』としてその後の黨内で中心的勢力を構成するにいたる。ミフがコミンテルン、駐上海代表として來華するとともにいよ〳〵陳氏は頭角を現はし、當時の李立三のコースを誤謬であるとして痛烈に攻撃、一九三〇年末には李立三コースの修正が陳氏らによつて完全に行はれ、それまで黨内において猛烈な勢威を振つてゐた李立三氏を退陣せしめるにいたつた。翌年黨總書記となつたが、ついでモスクワに赴き、中共モスクワ代表團主席となる。一九三五年のコミンテルン七全大會には、中國における民族統一戦線の理論を提出して承認され、これがその後における中國の抗日人民戦線——民族統一戦線にまで展開する端緒となつた。その後も抗日理論の筆陣を張り、中日事變おこり、一九三八年歸國、政治局委員としてずつと活躍してゐたが、七全大會後政治局委員を退いてゐる。

賀龍

終戦後の國共軍事衝突のうちでも最も烈しかつた内蒙戦線の包頭攻圍軍を指揮したのは、終戦前まで晋綏陝甘寧五省聯防軍總司令として、陝甘寧邊區の留守兵團、河防軍、各保安隊及び晋西北軍區軍に采配を揮ひ、國府胡宗南軍の延安包圍に對抗してゐた一二〇師長兼陝甘寧邊區軍區司令賀龍將軍であつた。

包頭の攻略は遂に成らなかつたが、包頭死守の傅作義軍を城内に閉ぢこめ、連日巨砲陣で砲撃し、城は今にも落ちるかと危ぶまれた程の激戦振りであつた。

其後重慶における國共會談が漸次進捗するに伴ひ、やがて圍みを解いて察哈爾方面に引き揚げることになつたのであるが、その時には國府側から賀龍戦死の報道が眞しやかに流布された。しかし本年二月になつて賀龍將軍が晋西北軍區の參議員に當選したとの報が傳へられるに及んで其

の虚報であつたことが判明したわけである。

賀龍戰死の報を撒いて中共軍全體の士氣沮喪を國府側が狙ふほど、彼の勇名は昔から全中國に鳴り響いてゐるのである。就中一九二七年八月一日のかの南昌暴動に第二十軍長として主役を演じた時の彼の勇猛振りは今でも中國の語り草になつてゐる。

彼の風貌は彼のこれまでの行動から推して相當色の黑い逞しい偉丈夫が想像されるが、事實は全くそれに反して、至つて小柄な優男で色の白いことは中共黨軍要人中隨一だといはれる。

彼は湖南省大庸の產、一八八七年生れで本年ちやうど六十歲である。生家は相當の家柄で、湖南桑植地方に二代續いた哥老會の親分である。

彼が十六の年、湖南省西部に飢饉が發生し慘狀目もあてられぬものがあつたが、當時の湖南軍閥は苛斂誅求至らざるなく、地方駐屯兵の暴狀は募るばかりであつた。

この時彼は衆に率先して起ち、谷間に水を掬む一兵士の後ろから忍びよつて、菜刀の一擊にこれを殪し、その銃を奪つた。そして村民一同に說いて靑少年同志百十七人を獲、其夜直ちに隣村の軍兵駐屯所を襲つてこれを破り、小銃四十挺を奪つて綠林生活に入つたのが、そもそも彼の今日ある初めといはれるから少年時代から膽玉の据つた恐るべき人物であつたに違ひない。

學問は幼少から苦手で遂に正式の教育は受けなかつたが、今では相當文理に通曉してをり、軍中の重要な文は必らず目を通し、修正すべき箇所は一々これを秘書に指示する點など、かの馬占山に似たところがある。

一九一二年頃から農民軍の編成をはじめ、二一年頃には湖南で誰知らぬものもないくらゐの親分になり、彼の麾下の軍隊は一萬人くらゐになり、二五年招撫を受けて四川建國軍第二師長となつた。

二六年の北伐には進んで參加し國民革命軍第九軍（彰漢章）第一師長に任命された。次いで武漢政府成立後、湖北省東部の首樹で反蔣の旗を擧げ、獨立第五師々長に就任、其後河南省方面で奉天軍を粉碎した功により、第二十軍長となつて張發奎の麾下に屬した。

一九二七年七月、武漢政府崩壞するや彼は麾下部隊を率ゐて南昌に赴き、葉挺氏らと共謀して八月一日の南昌暴動を起し、譚平山、郭沫若、惲代英ら七名を主席團とする中共革命委員會を組織したが、彼もまたその一人であつた。

南昌暴動失敗後、葉挺氏らと共に福建、廣東に遊擊したが、東江の一戰で粵桂聯軍に散々打敗られ、身を以て香港に遁れ、そこで周恩來、李立三氏らと遭ひ、その紹介で正式に入黨した。

次いで黨の命令を受け、露人顧問アトリフスキイと一緒に上海に潛行し、漢口を經て歸鄉、舊部下を集めて工農紅軍第三軍を組織し、周逸群氏を政治委員として湘西ソヴエート區を創建した後、東進して武漢西方の洪湖地方を占領し、湘鄂西ソヴエート區をつくつた。同ソ區の政治委員は毛澤東氏と同學同志の夏曦氏で、外にロシヤ人顧問八名がをつた。

一九三〇年夏の中共軍の長沙進擊には第二軍團總指揮として活躍し、三一年には中共中央委員に任命された。（三四年再選さる）

三二年、蔣介石軍の「圍剿」により湘鄂西ソ區が潰滅すると、彼は部下を率ゐて河南、陝西、四川を遊擊し、一千六百哩の遊擊線を描いて古巢の鄂西ソ區に辿りつき、三五年十一月までそこで頑張つた。

後、黨の命を奉じて貴陽、昆明を脅威しつゝ西遷し、三六年十月に甘肅に達し紅軍第五集團軍總司令となつた。三七年國、共第二次合作後、第八路軍第一二〇師長となり、政治局委員を兼ね、抗戰發動後は一時河北方面まで進出して來たこともあつたが、其後は專ら山西省西北隅の興縣一帶を根域に晉西北軍區の建設に努め、三九年八月には國府軍事委員會委員、四二年には晉綏陝甘寧五省聯防軍總司令に任ぜられ、當時豫想された日本軍の陝北進擊に備へる一方、重慶側延安包圍軍の牽制に當つた。

終戰直前の爺臺山事件に當つては重慶側の最精强部隊たる胡宗南軍の進擊を堂々喰ひ止め、中共軍侮り難しの感を與へたが、これは其後の國共妥協を促進する一因子となつたともみられる。

終戰後晉綏邊區と陝甘寧邊區が分れてからは專ら陝甘寧邊區軍區の司令として活躍してゐる。なほ妹の賀英（玉姑）女士は、女ながらもよく男兵の一軍を指揮し、一九三九年頃は冀中高陽縣方面で活躍した。

徐向前

抗戰初期に山東縱隊司令として、日本軍の勢力が最も强かつた山東に入り、陳光麾下一一五師東進支隊などの協力を得て魯蘇豫邊區軍區を建設し、山東の中共地盤を確立した徐向前氏は、其後延安に歸つて中國人民抗日軍政大學總校の校長に就任、同時に五省聯防軍副司令、陝甘寧邊區軍の參謀長などを兼ね、黨軍幹部の養成に努める傍ら、賀龍氏を助けて陝甘寧根據地の防衛に挺身した。

一二九師の師長劉伯承氏とゝもに中共軍切つての猛將と謳はれてゐる。

然し彼に會つた人は皆、どこから見てもそんな猛將とは見えぬ蒼白いインテリ型で、キチンとした服裝に皮靴を穿き、神經質にさへ見える美男子であるのに驚ろかされるといふ。

一九〇二年山西省五臺縣に生れた。父は清末の秀才。太原師範學校を出てから暫らく五臺の壯志中學附屬小學校の教員をしてゐたが、二四年廣東に行つて黄埔軍官學校に入り、ボロヂン等の薫陶を受けた。同期生に現在の國府側「反共」將領中の中心人物たる胡宗南氏がゐたのは面白い。

卒業後北伐に參加して國民革命軍第二軍に勤務し、二六年國民軍の武漢占領後、湖南學生軍團の政治部主任となり、後、武昌の軍事政治學校教官をやつてゐた時に入黨した。

二七年國、共分裂當時は張發奎軍の參謀部にあつたが、これを脱して武漢、上海を經て廣東に赴き、同年末、廣東コムミニーンに參加、失敗後海陸豐ソヴェート區にゐたが二九年、鄂豫皖ソヴェート區に入り、第三十一師長から第四軍參謀長となつた。三二年の第四次圍剿に依つて、鄂豫皖ソ區が潰滅すると、彼は軍長の鄭繼勛氏に代つて全軍を統べ一千四百哩の遊擊行の後、四川東部に落付き、そこに川陝ソヴェート區を創建した。

三四年江西中央ソ區が潰滅し、紅軍が西遷を開始すると、川陝區も中共中央の命を奉じて西移し、四川西部で紅軍主力と合體した。

然し包坐會議では毛澤東氏の陝西入據論と意見が合はず、張國燾氏とゝもに四川省毛兒蓋地方に據つた。其後さらに西康、甘肅方面を遊擊してゐたが、七、七事變勃發するや逸早く延安にかけつけて毛澤東氏を感激させ、やがて山東に出動した。現在、中共中央委員で同軍事委員をも兼ねてゐる。

林彪

七、七事變前から軍官學校、抗日軍事政治學校、後の抗日軍政大學總校などの校長を歴任し、多年青年幹部の養成に盡瘁してきた林彪氏は、今や黨内青年派の領袖として推しも推されもしない存在になつてゐる。

その上、毛澤東氏との關係は、國府における蔣介石氏と胡宗南、陳誠氏あたりの關係に近似し、その絶對信頼を受けてゐるといはれるから、その動きは將來の中共中央の動向に直結するものとして注目される。

終戰後、嘗て自己の率ゐた一一五師を基幹とする山東の魯蘇豫邊區軍區に司令として特派さ

れ、中共が華中との連絡基點及び渤海を渡つて東遼に出進する東北工作の據點として重視する山東の地盤確保とその擴大の重責を擔ふことになつたのも、毛澤東氏あたりから豫てその力倆を高く買はれてゐたからに外ならない。

新四軍長陳毅、一一五師長陳光氏らの緊密な協力下に津浦膠濟兩沿線地區をはじめ魯東、魯西の地盤擴大工作に成功してゐるのも、全く林氏ならではの感が深い。

彼は湖北黃安人で一九〇八年生の三十九歳、江西時代から名を賣つた人としては珍らしく若い方である。

父は揚子江通ひの汽船の會計掛であまり裕福な暮らしはしてなかつた。湖北の中學生時代には同省の新文北團體である「社會福利社」の一員だつたが、二五年に共產主義青年同盟に加入し、その後入黨した。

黃埔軍官學校卒業後は張發奎麾下の國民革命軍第四軍に入り葉挺部隊に屬して北伐に參加し、南昌暴動には第四軍を率ゐてこれに參加したが、同暴動が失敗してからは朱德部に屬して湖南を遊擊した。

一九二九年紅軍第四軍長、三二年には僅か二十五歳で第一軍團司令となつた。

三六年、紅軍軍官學校々長、三七年抗日軍事政治學校長、同年一一五師長となり、三八年初頭には一一五師を率ゐて河北、山西に進出したが、冀西に副師長聶榮臻氏を、東晉に支隊長陳光氏を留めて、それぞれ邊區設定の準備をさせ、林氏は間もなく延安に歸つて「抗大」總校の校長兼中央委員となつた。

劉伯承

軍事參謀としてはむしろ葉劍英氏の右に位する中共の第一人者である。

一九〇〇年生れの四十七歳、四川人で卒伍から身を起し、全身に無數の彈痕、刀傷がある上に隻眼である。

一九二六年入黨し楊森軍の黨代表兼中共湖北省委の特派員として湖北西部に黨の基礎をつくることに努力した。

南昌暴動の際は軍事委員會の總參謀長だつたが、失敗後モスコーに留學し、紅軍軍官學校に四年在學して專ら軍事、政治學を修め、立派な成績を收めて卒業した。

三〇年歸國したが李立三に疎まれて頭角を現はすことが出來ず、周恩來氏の推挽で僅かに軍事

委員會の一參謀に任ぜられたゞけであつた。然しこの間に氏が刻苦飜譯した紅軍野戰令等の軍事書籍は其後中共軍に大きな影響を與へる結果となつたのである。

三一年李立三コースの崩壞後、江西中央ソヴエート區に入り、彭楊軍事學校で兵を練ること二箇月にして同校の面目を一新し、朱毛兩氏を感服させた。かくて再び紅軍總參謀長兼軍事委員會常任委員に返り咲いたが、七、七事變後八路軍の編制に當つては、賀龍、林彪兩氏と竝んで一二九師の師長に任命され、晉東南を根城にして晉冀魯豫邊區軍區の建設を擔當することになつた。

晉東南から冀南、豫北にかけては國府の舊冀察戰區系軍隊及び山西軍が蟠踞してをり、地盤の開拓を圖る毎にこれらの軍隊と衝突し工作は難澁を極めたが、日本軍の對國府軍作戰が繰り返されるたびに强引にその跡を押へ、着々同邊區を强化し、現在では、冀南、晉冀魯豫、太行、太岳の四軍區を擁し、中共諸邊區中でも最大最强力のものになつてゐる。

終戰後、北上する國府二個軍を冀南で潰滅せしめ二軍長を捕虜とするほか、新たに國府系軍隊となつた舊南京政府系軍隊をも手玉にとつてゐると傳へられる。

なほ氏のロシヤ語は今でも中共軍將領きつての定評がある。

聶榮臻

四川省重慶近郊の農家の出で、一八九九年生れだから、本年四十九歳になるわけである。

重慶中學では學生運動の中心であつた。一九二〇年留佛苦學生となり巴里大學で自然科學、白耳義大學で電氣學を學んだ。

二二年伯林、二四年モスコー東方勤勞者大學に六箇月在學、二五年歸國後は黃埔軍官學校政治部秘書として周恩來氏の片腕と目せられた。

二七年葉挺軍の政治委員として南昌暴動と廣東コムミューンに參加、暫らく香港に隱れてゐたが、三〇年には出でゝ河北軍事委員會の黨工作を主宰し、三一年には中央ン區第一軍團の政治委員となつた。

八路軍の編制に當つては一一五師の副師長として林彪氏の副將となり、共に河北方面に出擊したが、三七年末より林氏と分れて冀西に殘り、晉察冀邊區を建設、邊區政府主席兼軍政委員會書記、邊區軍司令（後に主席のみ宗邵文氏に讓つた）となつた。

終戰後は冀西の山を下つて逸早く內蒙平原に出で、張家口に邊區政府を移轉し、邊區參議會など

を開いてゐる。

同邊區は終戰前から稅制、金融、合作社運動、一般行政などすべての面に亘つて「模範邊區」と稱せられるほどの充實振りを示してをり、中共が內蒙、東北に進出する最大の據點として重視されてゐるから、聶氏の今後の活動振りは大したものがあらう。

もちろん今も中共中央委員の一人である。

吳玉章

中共中央委員で政治協商會議には中共代表として出席した。第一革命以前から中國革命に奔走し、孫文氏の下ですでに活躍してゐる老革命家である。中共創立以來、中央委員に選ばれ、黨內でも徐特立氏とともに最長老である。中共の憲政促進委員會理事長をつとめるとともに中央研究院長、自然科學研究會長、魯迅藝術專科學校長などの名譽職を兼ねてゐる。終戰後は中共の戰爭犯罪人調査委員會主席にあげられ、終戰直後近衛公の逮捕を要求、また天皇以下二百餘名の戰犯名簿を發表、さらに中國では岡村大將を戰犯第一號に、多田大將を同第二號に指名するなど活潑な動きをみせ、政協代表として重慶に乘込んだときも記者團に『日本にはまだ戰犯が多數活動してをり、澁澤藏相、宇垣大將、町田忠治、石原中將などの逮捕を要求する』と語り、元氣旺盛なところを示してゐる。

陸定一

中央委員の一員であり、政協に出席した。一九〇七年、江蘇省に生れ、一九二四年入黨、東南大學卒業後、アメリカならびにモスクワに留學し、歸國後一時新聞記者となる。江西ソヴエートに參加し、中共第一方面軍宣傳部長となり、一九四三年、第十八集團軍政治部主任として華北前線で政治工作に挺身。毛澤氏、馮文彬兩氏などともに中共の中堅幹部を構成してゐる。

徐海東

大西遷後陝北に入つて一息入れた毛澤東、徐海東、劉子丹の聯合紅軍は一九三五年初領黃河を渡つて山西に進入し、アッといふ間に全省の三分の一を占領して太原城間近にまで迫つた時徐氏の勇猛振りは眞に驚くべきものがあつた。

抗戰中は別に一軍を率ゐたことはないが、軍事委員として中共中央に重きをなし、終始、朱毛

兩氏のよき相談役になつて現在に至つてゐる。

氏は皖南事件で殪れた項英氏と竝んで、無產階級出身領袖の双璧であつた。國共分裂當時蔣介石氏は徐氏と毛澤東氏の首に對し、十萬元の懸賞を發表したこともあるほどで、多年の奮鬪で彼は身に八創を負うてゐるといふ。

一九〇〇年生れの四十七歳、陶工の子で小學校も滿足に出てをらず、十一歳から稼業に精を出し、十八で結婚したが、間もなく漢口、九江、南昌方面に出稼ぎし、二十三の時兵隊になつた。

一九二五年張發奎軍の小隊長となり、二七年中共に入黨、二八年歸鄉して農民自衞隊を組織した。三二年徐向前軍が四川に遷つた時、彼は第二十五軍を率ゐて湖北に殘り、三四年はじめて湖北を去り、第十五軍團司令として陝西北部に入つたのであつた。

三五年山西進入から歸つた後は、軍司令を辭し專ら軍事委員として黨軍の發展計畫に參與することゝなつて現在に至つてゐる。

李立三

湖南省人、一八九六年生れ。湖南中學卒業後、フランスに渡り苦學す。歸國後黨員となり、上海總工會委員長として五、卅事變を指導して早くも鋭鋒をあらはす。武漢國民政府樹立後はその下にあり、湖北の農民運動を牛耳る。一九二七年、國共分離後南昌暴動に際し、革命委員會委員となり、九江における八、七會議後、湖南に下り、黨中央委員、政治局委員となり、宣傳部長を兼ねる。一九三〇年、中央政治局をして『一省または數省における勝利』の戰術に關する決議をせしめ、その結果、共產軍の長沙占領となつたが、直ちに失敗、これが李立三コースの誤謬として黨內の陳紹禹氏一派から猛烈に攻擊されるにいたり、李立三コースの修正となり、ついに李立三自身も失脚、一九三一年モスクワに赴き、その後全く鳴りを靜め、世人から忘れられてゐたが、一九四五年の七全大會では突如中央委員と復活してをり、今後の活躍が期待される。

蕭勁光

陝甘寧邊區軍區の副司令（兼後方留守兵團司令、河防軍司令）として賀龍司令が華北に、內蒙に東奔西走してゐる間、がつちりと中共の總本山たる延安地區を護り通してゐるのは蕭勁光氏である。

氏は湖南人で一九〇四年生れの四十三歳。郷里の中學卒業後一九二〇年から四年間モスコーに留學し、一たん歸つて黄埔軍官學校に學んだ後、また二七年から四年間モスコーに行つてゐた。三一年江西中央ソヴエート區に入つて第七軍團司令となつた。七、七事變後現職に任ぜられ、四〇年頃から延安地區包圍の中央直系軍、山西軍、傅作義軍などゝ屢々訌爭したがビクともしなかつた。爺台山事件では賀龍氏と連名で胡宗南氏らに通電を發し國府軍を糾斷した。

ロシヤ語に巧みで彼の夫人もモスコー留學生出身といはれる。

秦　邦　憲

博古の筆名で知られる浙江省寧波、一九〇七年生れ。蘇州の省立第二工業學校に學び、一九二五年、蘇州學生聯合會主席となる。ついで上海大學に入る。一九二五年入黨し、翌年から一九三〇年までモスクワで勉學、一九三〇年、黨員劉群先女史と結婚、上海に歸り、職工聯合會で工作に從ふ。李立三コースには陳紹禹一派『二十八宿』の一人として反對、一九三二年秋江南ソヴエート區に入り、一九三五年、西北ソヴエート政府主席兼外交委員、政治委員、組織部長。翌年西安事變おこるや中共代表の一人として西安に入り、事變解決に活躍した。第二次國共合作後武漢に出てきて國共交渉を擔當してをり、英語、露語を巧みに話し、黨内有數のマルクス主義理論家として知られてゐたが、政協後、政協綜合委員として重慶にあつて活動中、四月はじめ延安への歸途搭乘の飛行機が墜落し、王若飛、鄧發、葉挺夫妻らの諸氏とともに死亡した。

王　家　祥

一九〇七年、安徽省蕪湖に生れる。上海大學卒學後、モスクヲ留學、一九三一年、瑞金政府の外交人民委員となる。その後紅軍政治部主任、革命軍事委員會副主席、八路軍政治委員を歴任、一九三年負傷第一線から隱退した。六全大會で政治官委員に選ばれたが、一九四五年の七全大會では政治局委員を辭してゐる。所謂『二十八宿』の一人で、ロシヤ語をよくする。

任　弼　時

現在中共中央政治局委員の要職にある任氏は一九〇四年、湖南生れ。湖南中學卒業後、モスクヲ東方大學に留學す。また中國青年團書記をつとめたこともある。一九三一年、中央政治局七委員の一員に選ばれ、第六軍の政治工作、賀龍軍の政治委員を擔當、一九三五年、湘鄂西區ソヴエ

ート政府主席となり、一九三七年、紅軍から第八路軍への改編當時、政治部主任となり、北方局書記を兼ねてゐた。

蕭　克

蕭克氏が華北に現はれたのは七、七事變後間もなくのことで、鄧發氏らと共に早くから北平西方宛平縣の山奥にある東齋堂附近に來て平西、平北の民衆武裝工作と北平市内外の地下工作を指導した。

麾下軍隊は冀察熱挺進軍と呼ばれ熱河進入の先鋒部隊的使命をも帶びてゐた。

一九四二年冀察熱挺進軍を晋察冀邊區軍に合し蕭氏は同邊區軍區の副司令となつた。（挺進軍の駐區は十一、十二軍分區となる。）

終戰後同邊區軍が張家口に入るや彼は別動隊を指揮して綏遠省城歸綏の國攻に向ひ、血戰數十日に亘つたが、國内の澎湃たる國共停戰要望の聲に應へて遂に圍みを解き察哈爾に引き揚げた。

この時氏も包頭圍攻の賀龍氏とともに戰死したと重慶側から傳へられたが後になつて虚報であることが判明した。

彼は一九〇九年、湖南省嘉禾縣の秀才の家に生れた（本年三十八歳）。父から舊學を授かり、湖南師範學校に二年半學んだが中退して廣東に赴き、一九二六年蔣介石氏麾下の憲兵になつた。

二七年張發奎麾下の鐵軍第二十四師の一兵卒となり、師長葉挺氏の影響を受けた。

南昌暴動後はじめて小隊長となり入黨したが、間もなく歸鄉し、三百人から成る獨立游擊隊を組織して井崗山に登り、朱德麾下の聯隊長となつた。

三一年師長、三二年二十四歳東軍長となつた。三四年黨の命令で賀龍軍と合し、以來ズッと同一行動を執り、賀、蕭軍と呼ばれた。其後第三十一軍長となり、西遷後は賀龍氏と別れ、八路軍編制の際は北上挺進隊司令として河北省北部に派遣されたのであつた。現在はやはり中共中央委員の一人である。

張聞天

洛甫の筆名で有名な張氏は現在中央政治局委員の重要地位にある。一九〇〇年、江蘇省南滙の富農の家に生れ、吳淞中學、河海工程學校（在南京）を經て、一九二一年、米國へ來り、カリフォルニヤ大學に學ぶ。一九二三——二四年四川省で教員をつとめ、翌年黨に入る。ついでモスク

ワへ留學、陳氏一派『二十八宿』の一人として歸國。一九三〇——三三年、黨上海政治局で工作にあたる。同年さらに江西ソヴエート區に入り、黨書記となる。翌年の第二回中國ソヴエート區全國大會で中央ソヴエート政府人民委員會主席となる。黨內屈指の理論家たる彼はその後も黨機關紙その他を通じて政治論文を續々發表、彼の著はした中國革命基本問題は黨學校の教科書に採用されてゐる。

廖承志

孫文氏を援けて第一次國共合作に活躍した古い國民黨員廖仲凱氏を父とし、同黨員何香凝氏を母として、一九〇八年東京に生れる。日本に十一年住な、一九一九年歸國、嶺南大學に入り早くも學生リーダーとして名をあげる。一九二五年、廣東の沙基事變に參加、同年父仲凱氏が暗殺されるや日本に渡り、早稻田大學に入つたが、一九二八年、退學處分に遭ふ。ついでドイツ、ベルギー、オランダを轉々として各地における中國人船員に對し働きかけ、ハンブルグでは遂に逮捕追放され、直ちにソ聯に潛入した。一九三二年、上海へ歸り、また逮捕され、母香凝氏の盡力により保釋となる。釋放されるや直ちに江西ソヴエート區に走り、長征にも參加す。ついで延安で出版局長、解放雜誌編輯にあたり、太平洋戰前は香港に出て、中共代表として活躍。一九四二年、重慶側に逮捕され、その後屢次の國共交渉には彼の釋放が葉挺將軍とともに中共側から要求されたが、遂に一九四六年一月、政治協商會議の結果、葉將軍とともに釋放され、今後の再起が、注目されてゐる。

鄧穎超

中共中央委員で、また參政員として重慶にあつて夫君周恩來氏を援けて活躍し、過般の政治協商會議にも代表として名を列ねてゐる黨內隨一の女闘士である。一九〇二年、河北省に生れ、天津の南開大學に入り、五、四運動に女學生として參加、逮捕される闘爭經歷を早くももについてゐる。そのころ周恩來氏と知り合ひ、一九二五年になつて廣東で結婚する。北平では高等師範の教員をやり、また國共合作時代には國民黨の中央委員にも選ばれてゐる。中日事變以來、重慶に出て夫君とともに困難な國共交渉を隱に陽に援け、黨內では婦女部長の椅子にあり、女天下の多い中國でも顯著な存在として知られてゐる。

羅炳輝

新四軍の師長中には粟裕、彭雪楓、李先念氏ら豪の者が多いが羅炳輝氏はその中でも最も出色の人物と目されてゐる。

師長中で中央委員に任ぜられてゐるのは羅炳輝、彭雪楓の兩氏だけである。

羅氏は一八九九年雲南省彝良縣の貧しい農家に生れた。十六歳の時に家を出て雲南軍に入り、累進して唐繼堯麾下の參謀部に勤務したが、一九二〇年、唐氏の失脚するやこれに從つて香港に入り、同地における唐氏の豪奢な軍閥生活を目のあたりに見て憤慨し、間もなく廣東に赴いて朱培德軍の參謀となり、北伐當時は同軍の營長としてこれに參加した。

南昌暴動の際は同地の駐屯軍として紅軍に武裝を解除されたが、其後朱培德氏の命によつて福州方面に紅軍と戰ひ、さらに江西省吉安の保安司令として紅軍と戰を交へるうち、反つて次第に共產主義に共鳴し、二九年入黨し、部下一個聯隊を率ゐて叛變、彭德懷軍に投じて紅軍第十二軍長となり、さらに朱德軍と合體して紅軍第九軍團司令となつた。

西遷に際しては一時西康に赴き、次いで朱德、徐向前軍と合して三六年十月甘肅に移動し、西安事件の際は甘肅省徽縣方面で胡宗南軍と戰つた。

新四軍成立後は同軍の第五支隊司令として第一支隊長陳毅氏らと共に葉挺軍長を助けて活躍したが、皖南事件後は第四師長の彭雲楓氏と共に陳毅新軍長を助け、主として淮南蘇皖邊區方面の建設に當り今日に及んでゐる。

鄧發

一九〇五年、廣東省勞働者の家庭に生れる。香港廣東間の汽船のボーイをつとめたこともあり、一九二五——二七年にわたり、香港職工會總業領袖として名を著はす。のち入黨し、さらに黄埔軍官學校に學ぶ。一九三一年、ソヴエート區成立するや政治局七委員の一人に任ぜられる。その後保安局長の職にもつき、女黨員陳慧情氏を妻としてゐる。抗戰中は民衆運動委員會主席となり、さらに一九四五年二月、バリーで開かれた國際勞働大會に中共代表として出席したが、一九四六年四月、王若飛氏らとともに飛行機事故で死亡した。

李雲昌

李雲長または運昌とも書く、河北省樂亭縣出身の所謂「樂亭兒」の一人であり、華南出身者の多い中共幹部中で徐向前（山西）呂正操（遼寧）兩氏と共に、少い北方出身幹部の三羽烏である。年齢は四十歳前後といはれる。中共の先達として有名な李大釗氏の血縁で、黨歴は新らしいが輝かしい抗戰閲歴を有してゐる。

七、七事變當初は唐山方面で黨工作に從事してゐたが、一九三八年初頭、開灤炭礦の工人を煽動して戰線脱落部隊等と結合せしめ、密雲の單得貴、單得福兄弟や包森部隊などをもその傘下に收め、冀東の遷安、遵化、平谷諸縣を根據地として平津北方地區の中共區建設と對熱河工作に專念した。

一時冀察熱挺進軍司令蕭克氏の指揮下にあつたが、其後冀中の第三縱隊司令呂正操氏と竝んで第四縱隊司令となり、晉察冀邊區軍區司令、聶榮臻氏の直接指揮下に入つた。そして冀東一帶に亘つて冀東軍區（第十三軍分區）を建設し、その司令となつた（副司令包森氏は一九四二年の日本軍の冀東「剔抉」作戰に戰死。）

四〇年頃より冀察熱區全般の領導權を握り、中共中央が將來の日ソ戰勃發に備へて滿華分斷路線を策定するに及び、對滿工作の直接責任者となつた。

一九四三年、日本軍は「一四一八部隊」なる特別警備隊を編成。司令部を唐山に設け、主として李雲昌軍に大彈壓を加へた。

然し李氏はビクともせず反つて「一四一八部隊」は「一死一怕部隊」である、と嘲笑、その必死の剿共工作を排してドシドシ熱河、遼寧方面に進出し、抗聯會組織は冀東及び熱南の全域に擴大され、四四年末には長城線より南滿にかけて冀熱遼軍區が新設されて、氏はその司令に任命されるに至つた。日ソ戰勃發するや彼は直ちに錦州より瀋陽（奉天）に向ひ、終戰と同時に營口、遼陽から安東方面までの要衝を押へ、冀熱遼軍區は晉察冀邊區軍區より分離して冀熱遼邊區軍區となつた。（李氏が邊區政府主席と邊區軍區司令を兼任）國府杜聿明軍が秦皇島に上陸し、滿洲の主權回復を呼號して北上するや、彼は張學良氏の次弟張學喜氏とゝもに山海關、錦州、遼中などで北上阻止の努力を試みたが成らず、中ソ間に瀋陽接收の交渉が行はれてゐる間に遼西から滿洲中原に兵力を迂回して瀋陽、長春間の諸要衝を押へ、哈爾賓に兵を入れ、齊々哈爾、海拉爾方面にまで攻略軍を向けた。

現在國府軍は一たん李軍の手中に落ちた開原、鐵嶺四平街、長春などを奪還し哈爾濱めざして北進中であるが、李軍も哈爾濱附近では一大反擊戰を展開するものとみられ、本年四月初旬滿洲

における國共停戰協定の成立が傳へられた後においても滿洲の軍政情勢は混沌たる不安の中にあり、李氏が今後林彪氏を援けて如何にこれに對處してゆくかは中國内外の注視の的になつてゐる。

劉少奇

一九〇五年、湖南に生れ、現在中央政治局の委員をしてゐる。中學卒業後モスクワへ留學、一九三三年、全國總工公會々長となる。マルクス・レーニン主義に精通してをり、一九四五年の七全大會には黨章修正の報告を擔當してゐた。

丁玲

本名は蔣禕文女史。一九〇七年、湖南省常德に生れた。同地の教會學校卒業。上海で陳獨秀氏の主宰する平民女子中學に入る。ついで上海大學に入學、同校で瞿秋白の指導をうける。北京大學聽講生として北京へ赴き、一九二四年、胡也頻と結婚。そのころから文筆方面に秀れ、革命文壇に進出し、新月社に加入。上海では左翼作家聯盟に入り、革命運動の一翼を擔當する。一九三一年夫君胡が殺され、丁女史も一九三三年、上海で逮捕入獄する。釋放後西安、北京を經て陝北ソヴェート區へ辿りつく。延安の紅軍大學で中國文學を講讀したり、『二万五千里長征記』の編輯主任をやつたりしてゐたが、抗日戰勃發後八路軍の隨軍秘書となり前線で活躍した。著書には『王女史の日記』『闇の中で』『水』『母』などがあり、最近は延安の洞窟の部屋で糸車を紡ぎショーロホフの『靜なドン』トルストイの『戰爭と平和』を愛讀してゐる。

吳亮平（黎平）

一九一〇年、浙江省奉化に生れた。上海の南洋中學を出て厦門大學に學び、すでに學生運動の指導者として頭角をあらはす。五、卅事變には學生を率ゐて宣傳工作に從ひ、大夏大學を代表して上海學生聯合會に出席する。一九二六年、共青に加入する。ついでモスクワ、ベルギー、イギリスを歴訪、一九二九年、上海へ歸り、黨の秘密工作にあたる。一九三一年、上海共同租界で捕はれ、翌年出獄し、江西ソヴェート區にいたる。中央ソヴェート政府の經濟人民委員となる。長征のときには第一軍團で政治工作を擔當し、陝西にいたり、宣傳部長となつてゐた。英語を巧みに操る。

呂正操

遼寧（奉天）省出身、本年四十二、三歳。七、七事變當初は萬福麟麾下東北系第五十三軍の百何團かの團長（聯隊長）をやつてゐたが、同軍南走の際、河北省中部の平漢線東方地區にとり殘され、肅寧、河間、任邱縣境方面に潰殘部隊を收編して蟠踞した。

一九三八年初頭、冀西に進出してきた一一五師から協力を求められて其の傘下に入り、冀中第三縱隊として政治委員程子華、政治主任朱良才氏らの指導を得て冀中軍區を建設した。

中共軍に參加した當初は中共側の主張が仲々納得できず屢々政治委員と衝突する始末であつたが、後「抗大」に送られて直接黨政領袖の謦咳に接し、その指導理念を把握するに及んで熱烈な共產主義者に轉じ、歸任後はむしろ政治委員に先行して、どしどし軍區組織の擴大工作に專念するやうになつた。

一九四二年初夏、日本軍は「冀中軍區剿滅作戰」を實施し、三軍分區司令を始め多數の軍區幹部を失ふ程の打擊を同軍區に與へたが、四三年同軍區は晉察冀邊區の直轄軍區となり、呂正操氏以下が營々努力を續けた結果、間もなくその創痍は跡形もなく拂拭され「模範邊區」中でも模範の軍區として再建されるに至つた。

彼のその熱と努力が買はれたものか、終戰後には新設された晉綏邊區軍區の司令に拔擢され今後なほ波瀾を豫想される國共關係に對處して才腕を振ふことゝなつた。北方地盤の强化と東北問題の發展に伴ひ、中共部內における北方出身者の擡頭が將來ますます有望視される今日、彼の中共中央における地歩もいよいよ搖ぎないものとなつてゆくであらう。

蔡暢

一九〇〇年、湖南省湘鄉に生れる。一九二一年、フランスへ留學し、中共パリー支部に加入。一九二三年、黨員李富春と結婚、翌年歸國。一九二八年、コミンテルン六全大會に出席する。一九三二年、江西ソヴエート區に入る。最近は延安にあつて婦人工作に從ひ、佛語に巧みな女黨員中の元老である。

徐特立

一八七六年、湖南省長沙の出身。生家は貧農にして、十六歳まで私塾で讀書、後私塾の塾師となる（二十九歳まで）湖南師範に入學、三十二歳上海に出て江蘇教育會に入る。のち日本に赴き教育視察、歸國して長沙女子師範學校々長となる（八年間つとめる）四十三歳、苦學生として留佛、リヨン大學に一年餘、パリ大學に三年餘、獨に半年と勉學す。一九二三年、長沙に歸る。師範學校を同地に設ける（毛澤東氏も入學）。一九一一年、同盟會加入、一九二三年、國民黨へ入る。共產黨へは一九二七年、五十歳のとき入る。一九二八年、モスクワへ行き、中山大學に二年餘學ぶ、一九三〇年歸國　江西ソヴエート政府教員人民委員代理となる。日、佛各語を操り、また中國新文學の大家でもある。

成　仿　吾

一八九七年、湖南省湘潭に生れる。東京帝大卒。滯日中、郭沫若と深交を結ぶ。歸國後文藝評論家として賣り出す。黃埔軍官學校教官となる。その後創造社に參加、同社が國民黨によつて閉鎖されると歐洲へ渡り、そのときベルリンにおいて入黨。一九三〇年、潘漢年と上海で左翼作家聯盟をつくる。一九三四年、全國ソヴエート大會で中央執行委員に選ばれる。長征後、延安でり北公學校長となり、最近は創作活動よりも、政治工作に多く從事してゐる。晋察冀聯大校長、同時に晋察冀參議會副議長を兼ねてゐる。著書に『流浪』がある。

＝＝完＝＝

中國共產黨

昭和廿一年十月五日印刷
昭和廿一年十月十日發行

定價十八圓
（含特別行爲稅）

著者　朝日新聞東亞部

發行者　東京都麴町區富士見町二ノ三ノ八
前田又兵衛

印刷者　東京都王子區稻付町二ノ二〇八
二葉印刷株式會社

發行所　東京都麴町區富士見町二ノ三ノ八
株式會社　月曜書房
振替口座東京一九五一八一
電話九段（33）四四二八

配給元　日本出版配給統制株式會社

IHZ-24

曜